
転生してもうた!!～幻想郷～

咲魔@テラ駆け出しドンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生してもうた！！～幻想郷～

【Nコード】

N8215X

【作者名】

咲魔@テラ駆け出しドンだー

【あらすじ】

殺人者に妖怪に妖精に狂戦士に凡な能力者が繰り広げるはやめちゃストーリー！！

注※この小説は二次創作ですが、ストーリーは、二次創作的要素はあんまり無いです。それでも「おk!」とか、「大丈夫だ問題ない。」の人はゴーゴー！！「だが断る。」人はブラウザの戻るボタンへ

1

出逢い（前書き）

三作掛け持ち W W

不定期更新をご了承ください

出逢い

あきよしよるや
秋吉夜哉

性別は男

年齢は…来月で二十歳

独り暮らしで、大学生

両親は不慮の事故で他界してるんで、親族は無しつと…

大学は…まあ、教育学科の初等数学科

悩みは、……大学生になってまで体育の授業が有ることだな…俺、根っからのもやしっ子だからよ

今日も体育があって、……最悪だ

今はマラソンやってんだよ畜生

やっとこさ一日の授業が終わって、帰宅中

「今日の晩飯…どうすっかな…」

今は夏…夏…冷やし中華…

「卵とキュウリはあったな…なら麺と鳥と…」

最寄りのスーパーで買い物をする

勿論マイバックは持参だ

今時レジ袋は一つ十円だからな。節約は大事だと思うぞ

「さーて、買ったから帰るか……近道しちまえ!!」

柵を乗り越えて、裏通りにでた

♪♪♪♪♪

んお？ケータイの着信音だ
なんだろう？

因みにケータイの色はマゼンタだ

スマートフォン主流に成ったこのご時世でガラパゴス型を使うのは
ちょっとした好みだ

てか、画面に触るのは指紋がつくから嫌なんだよな…

件名は…《名無しに変わりました殺人者がお送りします》

なんだ？これ

こんなん登録した覚えがないんだけど…

本文は…っと

《はあい♪殺人者だよ。君は、すごい素質を持ってるねえ。すごい
というか、素晴らしいよ！！。世界に一つだけの貴重な素質だね
！！誇って良いと思うよ♪

でも、それが気に入くないんだよね。八月二日の午後七時半に★
君を殺す♪★待っててね》

…っと。どうせチェンメだろう？

信じる奴居るかよバーカ

大体、口調がファンシー過ぎるだろう。殺人者のクセに
馬鹿馬鹿しい

お、ヤバい。もう七時半か、早いとこ家に帰ろ

その時、爆音が鳴り響いた

裏通りの狭い道に陳列してあるドラム缶が勢いよく薙ぎ倒されたのだ

そこに、一人の少女が倒れていたのだ

髪は漆黒で、ポニーテールに結っている

かなり小柄で、身長は135…くらいかな

だが、雰囲気が大人びている…

服装は、普段の生活ではあまり見ないドレスである

これがゴスロリってやつか？

確かに、小さい子は嫌いでないがロリコンでは断じて無いぞ…

よく見ると、頭から血が…

「おっ…おい君、大丈夫かい？」

「んっ…ってて…殺人者め、不意打ちだけは…相変わらず…」

ん？殺人者？

「殺人…者！？」

「……？あなた…まさか」

直後、眼前にユラリと人影ができる

亦しても女の子

身長は隣の子とあまり変わらないだろう

染めている風でなく、自然な金色の髪を長く伸ばしている

左目には眼帯が着けてある

右手には……西洋剣？

「ターゲットが二人：僕の今日の運は最高のようですね。では、殺しますよ？」

そういつて、西洋風の両刃剣を片手で持ち上げた

ん？殺す？

「いやいや、待て待て待て。ウェイトアミニッツ。小さい子が殺すとか言っちゃ駄目だぞ？それに、女の子に剣を持たせるなんて親はどんな神経を……」

おk落ち着こう

状況把握は大切だと思うぜ？

ええと、金髪は《殺人者》……明らかにメールの奴だな

黒髪は：ターゲットって言ってたな

頭から血が出てるし……

「あんた、メール来たでしょ？あれ、あの子からの死刑宣告よ」

黒髪はそういつて、ケータイを見せてきた

そこには、やはり、俺と同じ内容のメールだった

「《異端排除》のね……！」

異端排除だって？

異端って…俺、すげえ体力ないし、特殊能力なんて厨二みたいなのもってねえぞ？

「でも、一対二は卑怯なので、僕は分身するのです」

金髪僕っ娘の姿が霞んだ

「これで、三対二ですね♪」

ちよっ！？それせこいぞ！！
同数じゃねえのかよ

「あんた…」

黒髪ポニーが話しかけてきた

「戦闘経験は？」

「皆無…ナイフ術なら少しかじってるがな」

黒髪ポニーはドレスのポケットからコンバットナイフを取り出して、俺に放り投げた

鞘を抜き、ナイフを構えた

一方、黒髪ポニーの方は、ポケットから漆黒の大鎌を…

「つて…待てい！！ポケットから自分の身長以上の物が入るか！！
てか、なんてもん持ち歩いてんだ！？」

「うるさいわね、ほら、来るわよ」

見ると、黒髪ポニーの方に二人、俺の方に一人だった

「敵の前でコントなんて、悠長ですね《殺戮人形姫》。そんなに僕は弱く見られてますか?……まあ、いいです」

殺戮人形姫?……厨二臭い

「つて、速っ!?!」

「驚きました、まさか僕の初撃を流される」

「そっ……そりゃどうも」

うわっ……小さい子に攻撃はしたくねえな

降ろした両刃剣が真上に迫る

何とか避けたが、そのあとも、連撃が降り注ぐ

「ふう、全部避けますか、すばしっこいですね」

「ぜえ……ぜえ……そりゃどうも……」

なんでコイツは息切れしてないんだ?
馬鹿なのか?

「でも、これは避けれませんよね?さっきのは序の口です」

両刃剣がみるみる内に細剣^{レイピア}へ変わっていく

「じゃ、僕に殺されてください♪」

最速の突きが自分を貫くまでの瞬間は何分にも感じた

そうか、コイツに心臓を刺されて、俺は死ぬのか
はあ、もうちょい、体力つけときゃこんなことに…

でも、コイツに抵抗しないのは癪に触るな
最後の抵抗しますかね!!

右腕を前に突き出した

心臓を貫かれるのは癪なので、右腕を犠牲にして、逃げる寸法だ

直後、俺の右腕を光が包みだした

金髪僕っ娘の細剣が弾かれる

「なっ!!? きゃあっ!!」

爆風に金髪が吹き飛ばされる

右腕を見ると、白銀の籠手に包まれていた

「……へ？」

何ぞ? これ

まあ、いいや。取り敢えず

「いったあ！」

殴ったいた

「なっ…僕を殴ったね!？」

「おう、殴ったぜ」

「き…今日の所は退散するよ!!」

なんなんだ一体

三人が…というか、分身だから一人か…が一目散に逃げていく

黒髪ポニーが血だらけで倒れている

「おっ…おい、大丈夫かよ!？」

「っ…大丈夫…よ」

起こしたら俺に倒れこんできた

「おっと、……ったく、仕方ねえな。家に来いよ、手当てくらいしてやる」

「……わかったわ」

「はい、交渉成立!俺は秋吉夜哉だ。お前は？」

「………うつのみやさくま宇都宮咲魔」

「そうと決まれば、行くぜ」

咲魔の体を持ち上げた
うお、かりい

「っ！何すんのよ！！」

「ん？歩けんの？」

「……歩けないわ」

さて、裏通りだから人は居ないけど、見られたら誤解を招きそうだな
全速力で家に走っていった

出逢い（後書き）

なんで転生シリーズばかりなんでしょね
W
W

幻想入り（前書き）

ほーい、では二話目どうぞ

幻想入り

夜哉 side

で、咲魔の手当てをして、ベットを貸し出している

俺の寝る場所が占領されたな…まあ、別に寝袋あるしいいけど

仕方ねえから冷やし中華の二日分の片方を咲魔にあげることにした

ベットまで持っていく

「今日は冷やし中華だぜ」

「……冷やし中華…久し振りね…いただきます」

非常に素っ気ない台詞だが、眼が輝いてる

そんなに好きか…

まあ、つくった甲斐があったものだ

それにしても、妙に大人びたと思ったけど、こうして飯を食ってる
ときは、年相応というか、外見通りというか…

「……ごちそうさま」

「どうだ？ 旨かったか？」

「まあまあね……」

ツンツンしちゃってよ

顔が嬉しそうだぞコノヤロウ

「それにしても、あの金髪僕っ娘は何なんだ？ 一体」

「僕っ娘って…まあ、大体違わないけど。あれは、異端狩りの《殺人者》よ。居るだけで世界に影響を及ぼす輩の排除が仕事なのよ」

「異端？ 俺は何なんだよ一体」

「右腕を見せて」

長袖を捲ってつきだす

先ほどは白銀の籠手が装着されていたが、今には通常の凡な…痩せた腕だ

無駄に色白だから恥ずかしいんだがな

「ちょっと、殺気を出すから抵抗してね」

「抵抗ってどうすれば…：うっ！？」

見えない圧力が襲いかかってきた
右腕を咄嗟に前へ突き出した

「ぐうっ…うおお！！」

亦しても右腕が光りだす

「くっ！！」

咲魔の殺気が消えた

再び籠手を見る

関節部分まで伸びた白銀の籠手で、爪の辺りがすこし尖っている

「はあっ…はあっ…」

咲魔が息切れしてることに気がついた

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫…よ。弱ってるだけだから」

「弱ってる？」

「それは良いのよ。まず、その腕は《全反射の籠手》よ。夜哉の能力ね」

「俺の能力？どんななんだ？」

「簡単に言えば、殺気とか攻撃とかを全部使用者に跳ね返す籠手よ。つまり、今の私の殺気を全部跳ね返されて仰け反ったわけね」

「む、そうか。ありがとな、大体わかったぜ。でも、さっきの弱ってるって？」

「諸事情で魔力、霊力、その他もろもろの力の八割を奪われたわ…だから夜哉の能力の解析が不完全なのよ…」

「解析が不完全？」

「夜哉の能力はその籠手だけ（・・・・・・）しか解らなかった……つまり、あんたの能力はそれだけじゃない。……殺人者どもに力を奪われてなければこんなことには……」

「いや、十分だよ。で、これからどうするんだ？」

「……殺人者に眼をつけられた以上、夜哉も安全じゃないわ……どこか、殺人者に見つかからない所に……」

「ふむ、確かにヤバイな。でも、現実的に考えて、逃げる所が無くないか？」

「無いから困ってるのよ……まったく、私は動けないし、今見つかったら殺されるわね。確実に」

咲魔はベットに寝転がった

「……痛むのか？」

「……………」

痛いらしい

今は頭とか、身体中に包帯を巻いたり応急措置はしてるんだが、まあ、すぐには治らないよな

「まあ、いいや。今日はゆっくり休めな」

「ふん。大きなお世話よ」

ん？今思った：

「咲魔、風呂はどうするんだ？」

「入れるわけないでしょ？汚いけど仕方ないわ」

「髪くらい洗ってやろうか？」

「……変態」

「ちげえ！！…ったく、命の恩人に少しでも恩返しをしようと考えた俺は馬鹿なのか？」

「じゃあ、お言葉に甘えようかしらね」

咲魔をおんぶして、風呂場に連れて行った

むー、シャワーは三十八度がちょうどいいか

浴槽に頭を出させて、髪を洗ってやる

こういうのを雑にしようとは思わないので、丁寧にシャンプーで髪を洗う

「上手いわね。美容師でも志望だったりするの？」

「生憎、小学校の教師志望でございますよお嬢様」

「ロリコンめ」

ぐあっ！！ひでえ…

ん？髪が固まってると思ったら血がついてんな…
おいおいマジかよ。今日ついたやつじゃなさそうだぞ

「咲魔、お前、いつから戦ってる？」

「一ヶ月前よ。風呂に入るのは一週間に一度あれば良い方ね」

「…ったく、だから身体壊すんだ」

「大丈夫よ。どっかのもやしと違って体力だけはあるから」

「そりゃどうも」

うむ、人気のシャンプーなだけあって心なしか髪が艶やかに見える
うを、綺麗だ

さっきまでボサボサだったのが嘘みたいにきらびやかな黒の長髪を
今は結ばず、垂らしている

見れば見るほど吸い込まれそうな感覚が芽生える黒
これは…可愛い

またも、抱き抱えてベットに寝かせた

「無様だわ…こんなもやしに世話を焼かれるなんて」

「はいはい、もやしで結構ですよお嬢様。ほら、よい子は寝なさい」

「はいはい、じゃあおやすみ」

「おやすみ」

午後12時就寝

夢をみた

夢と言っても、これは夢なんだと認識できるくらいの不思議な夢だ
どんな夢かって？

……ひたすら穴の中に墜ちていく夢だ

穴の中は気持ち悪いものだった

無数の目玉や白い腕が蠢いているのだ

光が見えた瞬間、……激痛が走って飛び起きた

「つてえ!!」

見たこともない場所？

あれ？ここはどこだ？

森の中みたいだ……っておい!!俺は自分の家で寝た筈だぜ
っ……落ち着け俺。まずは状況確認だ

まず、寝た。俺の家で

んで、穴に落ちる夢をみた

そのなかで光が見えた

そこまではいい

最後に、起きたら森の中だった

「落ち着けるかっ!!」

見上げたら、夢に出てきた不気味な穴があった

……人が落ちてきた

「のわっ!?!」

俺に降ってきたのは……まあ、予想はしてたが

「さ……咲魔?」

「う……ううん……夜哉? って!! なにまたお姫さまだっこしてるのよ!」

打たれた……ひでえ!! 親父にも打たれたことないのに!!

俺を打った手を痛そうに縮める咲魔

馬鹿め

満身創痍のくせにそんなことするからだ

「ここは魔力が多いわね……補給しよう」

終わったのか、俺の腕から飛び降りる

魔力が回復すると傷はある程度治るみたいだな……

「早く殺人者から獲られた力の八割を取り返さないといけないんだけど……仕方ないわ。歩くわよ、今の私は中妖怪程度の力しかないからしっかり守ってね」

咲魔は俺に武器を放ってきた

拳銃にコンバットナイフにスタングレネードに脇差し

「おいおい、俺より咲魔の方が強いだろう」

「《全反射の籠手》があるでしょ」

「そうですね……どうやって出すんだ？」

「さあ？ 念じたら出るんじゃない？」

念じてみる

右腕が光り出した

「おお、出た」

森の中を歩いていく

歩いていく

歩いて……また同じ場所

さらに同じ場所

まっ……迷った

やばいぞ……なんかキノコが自生してるんだが、なんか動いてるし……え？ 化け茸？

目の前に、髪をリボンで結んでいる金髪ショートの子の女が何処からともなく現れた

「ねえ、あなた達は食べてもいい人間？」

「ん？」

意味が解らん
食べる？俺を？

「夜哉、逃げるわよ」

瞬間、弾幕が眼前に展開される

「やっぱ！！断ち切る死痛の二つ鎌ダース・サイス！！」

咲魔が二振りの鎌を召喚した

次々と弾幕を引きちぎっていく

が、咲魔の額には大粒の汗が滴っている

「はあっ…はあ…」

「どけ！！咲魔あ！行くぜ《全反射の籠手》！！」

右腕の籠手に当たる弾幕を全て跳ね返す

ホルダーから5・7？口径の弾丸を打ち出す拳銃の、ファイブセブンを抜き、左手で連射する

「ちいっ…弾道が安定しない！！」

てか、銃弾避けるとか、どんな反射神経だよ！！

「あはは。お兄さんすごいね。後ろにお荷物抱えてるくせに」

「おい、今なんつった？」

「へ？」

「咲魔を、俺の仲間を、お荷物呼ばわりしたなクソガキ！！」

お得意のダッシュで接近していく
無駄な反射神経もこう役立つのか

弾幕をトップスピードでくぐり抜ける

「ちよつとま……」

「歯あくいしばれ！！」

籠手付きの右手でぶん殴った

気絶するかしないかのぎりぎりで殴るのを止める

攻撃したのは向こうからだから仕方ない

「ほら、森の抜け方を教えろよ」

「ふう…夜哉、気持ちは嬉しいけど酷いわよそれは」

「そうだな、我ながら、なんであんなに激昂したのやら」

「うゝ、道なんて知らないよ。いつもは飛ぶもん」

はー、地道に道を探すしかないか…困ったな…咲魔は魔力を多少回復したとはいえ、弱ってるし、この女の子より強かったら俺もヤバ

イし…

「そうだ、この道をまっすぐ行ったら人間の家があるんだった」

「お、そうか。ありがとな。お礼にチョコレートあげるよ」

「ちょこれーと？」

「食ってみろよ」

一口で食べた

幸せそうな顔がでている

俺は、咲魔を抱えて、森の人（仮）の家に向かっていった…

幻想入り（後書き）

因みに、金髪ショートリボンの女の子は、常闇の妖怪、
《ルーミア》
《たんでした》
そーなのかー

白黒の普通の魔法使い（前書き）

さて、幻想入りもしたし、後は妄想の赴くままに…徒然なるままに、
日暮…たら駄目ですねすみません

白黒の普通の魔法使い

夜哉 side

あれから一時間。そこそこ長い距離を歩いていたのだが、この期に及んで俺の疲労がピークに達していた。なんとも、日本男子らしからぬもやしっぷりに悩まされ、些か恥ずかしいながらも、咲魔に休もうと声をかけた

涼しい顔をしていたから、てっきり毒舌の一つや二つが俺の発砲スチロール性の心にブスブスと鏃をたててくるだろうと、たかをくくっていたのだが、その考えは杞憂に終わり、素直に了承した

咲魔とは付き合いが短い、そういう性格だとはわかっている積もりだが、珍しいものもあったものだと思い、近くの木にもたれ掛かって休んでいたのが運の尽き、二メートルはあろう、巨大な化け茸に完全包囲されてしまった

よく、某ドラ●エや、ポケ●ンは、《逃げる》と《道具》や、なんやかんや行動ができるのだが、そのふたつに関しては脳内に於いて選択肢として、採用されなかったらしい

「咲魔……は、戦えないよな？」

「……歩くのがやっとなんだけど」

前に戻るが、相方の咲魔は《異端狩り》にやられたらしく、魔力が極端に少なくて、身体を維持するのがやっとなことだ
だから、妖怪に会う度に俺を馬車馬の如く使う

……まあ、初対面の俺を守って(?) くれた恩があるし、女の子には優しいと自分でも自覚してるしな。仕方ない…のか？
しかたない筈だ…多分

咲魔は俺の後ろでダウンしてるから、まあ、ヤバくなったら助けてくれる…かなあ…

今の配置は、背中に巨大な樹、そして、半円状に化け茸がニヤニヤと顔を歪めて俺達を取り囲んでいる

俺は、《全反射の籠手》を右手に装備した

化け茸が触手を伸ばす

ホルダーからコンバットナイフを抜き、切りつけるが…

「固っ!!」

化け茸は三体。とてもじゃないが捌ききれない…

「だあああっ!! くそっ。どうすんだよ咲魔!!」

「……仕方ないわね」

コンバットナイフが光り出すと同時に咲魔は樹にもたれ掛かった

「はあ、この程度で魔力不足なんて…どんだけ魔力吸収されたんだか……。夜哉、コンバットナイフに炎属性付けたから」

「ああ、わりいな。よし、やるかあ!!」

触手の攻撃が弾けるようになってきたが、体力は一向に減っていないようだ：

「はあ…はあ…くそっ！！」

一体は倒したが、未だ二体の茸にタゲられてる

ああ、真面目に体力つけときゃよかったな：

マスタースパーク
「恋符！！」

どこからともなく極太のレーザーが化け茸達を焼き殺していく
とてつもない悲鳴をあげて化け茸は消滅した

「助かった…のか？」

俺の前に白黒のドレスに三角帽を被ったウェーブがかった金髪の少女が箒に乗ってきた：

もう俺は、驚かねえ。魔女が実在したって驚かねえもんな！！

「ふう、やっぱり弾幕はパワーだぜ！！」

なにやら奇妙な物言いだ。レーザーは弾幕じゃないな

「お礼を言いたいのはやまやまなんだが、ちよっくら。森の抜け方を教えてくれ」

「お？いいぜ。まあ、なんだ。私の家まで来いよ。見たところ渡来人みたいだしな」

渡来人て…あの弥生時代のやつか？まさかタイムスリップ？

「悪いな、連れがヤバいんでな。俺は秋吉夜哉だ」

「夜哉か。私は霧雨魔理沙。きりさめ まりさ普通の魔法使いだぜ！！よろしくな」

既に座り込んでる咲魔を抱えて魔理沙に案内されながら、森を歩いた数回化け茸とエンカウントしたが、さすが手練れているようで、レーザーやらレーザーやら、もしくはレーザーなどをばらまいて一網打尽にしていた

「よーし！！着いたぜ！」

……ボロい

そして、汚い…

家とは言えないくらい散らかった小屋に案内された

「まあ、散らかってるが気にするなよ。そいつはソファに寝かせていいぜ」

「さんきゅな」

咲魔を寝かせたらなにやら魔理沙が調べ始めた

「うおっ！？なんだこの魔力用量は！……にしては、魔力が乱れるようだな」

「コイツは、魔力を盗られたとか言ってたが？」

「まあ、本人はそう感じるだろうな…うーん、私の専門じゃないぜ…診た感じは、魔力を差し押さえられてる感じだな」

うん？ますます分からんぞ

魔力…がどうたらこうたらも理解出来てないのに、吸収とか、差し押さえとか…意味が分からんぞ…

「わ…悪いな魔理沙。話が見えない。俺にそんな専門用語話されてもな…」

「えっ！？お前、もしかして…！」

「おう、初心者だ。悪いがレクチャーしてくれると助かる」

「じゃあ、自分の属性とか性質とか知らないんだな…よし、今から私より詳しい奴んとこ行こうぜ！！」

「むう…」

「よし、決まりだな！！」

俺の意思を介さずに勝手に引っ張られた…まあ、いいんだがよ
咲魔は魔理沙の箒の後ろに乗せられた

数分後、何やら洋風の家に到着した
といっても、まだまだ森の中。化け茸や狼やらにエンカウントしま
くった…魔理沙がいなけりゃ死んでたな

魔理沙はなんの躊躇いもなくドアを開けた

「魔理沙、入るときはちゃんと声をかけなさい」

「おう。アリスの力が欲しいって奴連れてきたぜ」

は…話が噛み合っていない…だと

アリスと呼ばれた少女は溜め息を一つ、俺等を見た

「まあ、いいわ。入りなさい」

「失礼しますっ」と

うわ…綺麗な家…魔理沙の物置小屋とは大違いだ

「その子はベッドに寝かせていいわ」

「悪いな」

咲魔をベッドに寝かせた

魔法を使った後からずっと昏睡してるから死んでるんじゃないかと疑いたくなるが、微かな寝息が聞こえてくるから安心する

「用件はともかく、自己紹介がまだね。私は、アリス・マーガトロイド。人形使いの魔女よ」

魔女か…魔理沙は普通の魔法使いって言ってたからひょっとしたら定義が違うのかもしれない

「アリスか。俺は秋吉夜哉。あいにく、只の人間だ」
アリスに促され、椅子に腰かける

椅子に掛けたら、なにやら可愛らしい人形が紅茶を運んできてくれた
煎れ方が上手いようで、素人の俺でも分かる良い香りが漂ってきた

「ティーバッグで悪いけど、寛いでて。私は解析するから」

「あ、…ああ悪いな」

最近、「悪いな」ってばかり言ってる気がするのは気のせいかな？

他の人形がクッキーやらパウンドケーキやら、洋菓子をテーブルの
真ん中に置いてくれる。悪い気がするが、朝食をとってない事に今
さら気づき、食べ始めた

魔理沙は…遠慮？なにそれ食えんの？みたいな感じで、我が物顔で
むさぼり始めた

それにしても、大学を無断欠席しちゃったな…てか、ここから出れ
る気配が無いしな…

「結果出たわよ」

アリスが立ち上がって俺に報告した

「ど…どうだった？」

「一言で言うと、『毒』ね。大方、最上位くらいの毒属性の魔法と
か攻撃とかでないと、この魔力用量は抑えられないから」

「毒？」

「そ、毒。悪いけど、私の専門でもないわ。因みに、属性はいろんな種類があって、私が《人形》で、魔理沙は《光》ってとこね」

属性…そうだった、このことでも聞かないと…

「俺も、魔力を使えるらしいんだが。…解析、頼めるか？」

「良いわよ」

アリスは俺に近寄って、…調べ始めた

数分唸ったあと、ようやく解放してくれた

「め…珍しい属性ね。それに、二つも属性がある…」

一瞬、我が身はチートかと思ったが、使いこなせてないよな…

「なんなんだ？」

「《反射》と《ベクトル》ね…言うなれば、《反射を操る程度の能力》と《方向を操る程度の能力》ね」

「程度って…アリスと魔理沙はどんな能力なんだ？」

「私は《人形を操る程度の能力》。魔理沙は《魔法を使う程度の能力》よ」

まあ、そのまんまだよな

それにしても、これからどうすっかな…咲魔を助けるのは当然だが…

「まあ、能力説明も終わったことだし、そこに寝てる子も永遠亭に連れてったらなんかなるわね」

「なんとかなるのか！？なら、そこに……送ってください」

「敬語を使われなくても送るわよ……魔理沙が」

「私かよ！？まあ、いいぜ別に」

いいんだ…

ともあれ、アリスにはちゃんとお礼を言って、永遠亭なる所に向かった

勿論、魔理沙の箒に乗せてもらってだ

森をあっという間に抜けると、トップスピードでそのまま竹林…結構遠かったが…に向かい、なぜかそこいらじゅうに仕掛けてある罠を魔理沙お得意のレーザーで破壊し、時にはウサギを爆撃し…動物虐待だよな…ポツンと建っている《永遠亭》の前に到着した

白黒の普通の魔法使い（後書き）

咲魔く起きろよ咲魔く

ふっかーっ!! (前書き)

一話分にしては話の展開が早いです

では、ゆっくり (r y

ふっかーっ!!

夜哉 side

魔理沙に連れられ、《永遠亭》なる所に来た

日本のお屋敷のような出で立ちで、竹に囲まれてる事もあり、中々に風流だ。こんな家で毎日のんびりと暮らせれば人生最高だろうな…

「ごめんくださーい」

ドアをノックする

しばらくすると、扉が開き…ブレザー、ミニスカ、ウサミミ…

俺が想像していた日本屋敷とはかけ離れた人物が現れた

いや…でも、これはこれで

「よう鈴仙。永琳いるか？」

「師匠に用事ですか？呼んで来ますね」

鈴仙と呼ばれたウサミミは中へ駆けて行った

それにしても…男女比がおかしくねえか？さっきから男を見かけないんだが…

気のせいかな？気のせいなのか？

また、しばらくすると、赤と青のなかなか奇抜なというか、斬新というか…なロングスカートを着用した看護師っぽいお姉さん系の女性が現れた。やっぱり女性なんだ…

「よう永琳、診てもらいたい奴がいるんだぜ」

「久し振りね魔理沙。その男の子は新参かしら？」

「秋好夜哉です」

「礼儀正しいのね。私は八意永琳やいこうえいりんよ。よろしく。で、診てもらいたいって？」

「この子なんですけど…」

見せるなり、屋敷を案内され、標識に《診察室》と書かれた部屋に入る

診察室の備え付けベッドに咲魔を寝かすなり、診察を始めた

「珍しい毒ね。解毒薬の在庫はあるからいいけど」

「助かるんですか？」

「助かるわ…でもこの魔力容量は危険ね。いきなり爆発する可能性もあるわけだし…」

魔力って爆発するのかよ…危険だな

永琳さんが咲魔の右腕に注射した
すると…

「う…う…うん…」

早っ!! 幾らなんでも効きすぎだろう…

「おーい、大丈夫か? 咲魔」

「夜…哉。ここは?」

「お医者さんここに連れてきたぜ」

むくりと起き上がる

「ん、なんか魔力が少し戻ってる……でも少ない」

「あまり大量の魔力を体に流し込むと危険よ」

「あなたが医者? 助けてくれてありがと。料金は?」

「そうね…オリハルコンでも頂こうかしら?」

オリハルコンで…そんな伝説上の金属なんてあるわけないだろ…

咲魔がポケットに手を突っ込む

おいおい、流石にそれは…

「オリハルコンね、ここ置いとくわよ」

流石にオリハルコンは出てこないだろうとたかを括っていたらしい
永琳さんが目をむく

魔理沙は精一杯目を見開いている

「おいおい、何でポケットにんなもん入ってんだよ!？」

咲魔は盛大に無視をした

「魔力が少なすぎるからオリハルコンも一個程度しか出せないけど、一応料金代わりに受け取ってね」

その瞬間、咲魔はフラツとして俺にもたれ掛かってきた
同時に肘鉄と一緒に
なんとか受け止めたが、ちょうど鳩尾に入り、ちょっぴり半泣きになった

「お……お前……な」

「ふう、疲れたわ。こんなんじゃ宝具でも出したら某腹ペコ王みたいにぶっ倒れるのは確実ね」

どこにそんな王が居るんだよ!!と内心突っ込んだ

「オリハルコンを出した(……)!?それって自分で造ったってことか?」

魔理沙が大声で訊ねた

「煩いわね……。それ以外何があるってのよ。わざわざオリハルコンをポケットに常備してるとでも思ってるってわけ?」

……はい、すいません。俺、そう思っていました
いや、そんな便利な能力があったら苦労は無いです、はい

「私の能力は、無限の創造世界……そうね、《想像を創造する程度の能力》とでも言うておくのがいいわね」

……俺さ、自分の能力も反則だと思ったがよ、ここまで反則だとは思ってないぜ？

「……厨二」

「黙りなさい」

素晴らしく完璧なフォームで打ち出されたボディーブローを鳩尾に受けました

「ぐはあっ!!」

五分間のたうちまわった俺を見て、咲魔は素晴らしい笑顔を見せていましたとさ

「はあ…はあ…」

既に俺の瞼には涙が光っていた。幾らなんてそりゃねえよ…

「永琳、この魔力じゃ戦えないんだけど」

「仕方ないわ、いきなり魔力を解放すると、爆発して体が吹き飛ぶ恐れがあるから」

「大丈夫よ、不老不死だから」

爆弾発言に吹きそうになった

え？不老不死？マジで？

「それに、その程度で吹き飛ぶほどヤワじゃないわ」

咲魔さん、遠慮して下さい。それ以上強くなられたら俺への仕打ちが…

「全快にしてくれたら、何でも創造してあげるわよ」

「乗ったわ」

乗らないで！！お願いだから！

永琳さんの薄情ものー！

永琳さんは、棚から解毒薬の原料を調合しだした

さっきから、モルヒネやらハバネロやらヤバめの奴を沢山入れてるような気がするの俺だけか？

出来上がった解毒薬というやつは…まず見た目がグロい…蛍光ピンクの粘液…これを飲めと？

臭いもまた強烈だ。かの有名な『マルカメムシ』を磨り潰したような…いや、実際に磨り潰してたか…

とにかくカメムシの臭いが半端でない
それと、永琳さんの笑顔が黒い…

「くせえ…咲魔、飲める…のか？」

「……………問題ないわ」

おい、その間は何だその間は！

俺の思考を読み取ったのか、正拳突きをするが、こちらも《全反射の籠手》で対応する

「痛っ」

「あ、わりい」

「嘘よ」

平手打ちを食らった

俺…今日で何回打たれたかな…

「うう…流石の私でもこれはキツイぜ…」

魔理沙は顔をしかめた

「それ、一時間したら、蛍光ピンクから蛍光イエローに変わってカメムシの臭いからスカンクの臭いになるから」

永琳さんが残酷なことを申し上げなされた

「うう…飲めばいいんでしょ飲めば!!」

おお、流石のクソ度胸。言うことが違う

咲魔はピンク色の臭い粘液が入った瓶を、自らの口の中に流し込んだ

「んっ!!…っつっ!!」

………すっごく不味いんだろうな…少女よ、良い薬ほど苦いのだ

よ。覚えておきたまえ。たまえよ？

「つつつゝ！！」

だとしても、いきなりラリアットが飛んでくるのはおかしいと思うんだが

「夜哉、声に出てたぜ」

「なん…だと！？」

「うー、口の中がベトベトしてて…気持ち悪い……うっ…ゲホッ…ゴホッ」

これは酷い…

「うえっ……ふう…気持ち悪いけど、確かに魔力は戻ったわね。ありがとう永琳」

「代金は、そうね…ミスリルとダークマターでも貰いましょうか」

咲魔の手のひらが光り、直径三十センチメートルはある、物質を二つ召喚した

「確かに、頂戴しました」

永琳さんは、珍しい物質を三つも手に入れて嬉しそうだ
いま思ってたんだが、何に使うんだ…

永遠亭をでて、しばらく飛んだ…と言うか、俺だけ飛べないから魔

理沙の蒂に乗っけてもらつてゐる

なんか、どんぱちやつてる感じの音が聴こえる
幻聴…じゃないよな…

「ど……どうするんだ？ 咲魔」

「どうせ、避けて通れないんだから突っ切るしかないわ」

うお、魔力が戻ったから機嫌がいいな

三人は竹林を掻き分けて、音がする方に向かう

二人の女の子が…戦ってる……. とうか、格闘って規模じゃねえ。戦争に近いな

色とりどりの弾幕が展開され、どんぱちやつてるが、どちらも地面に当たると挟れている

片方は、着物に来て、黒の長髪で、もう片方はもんぺを着ている白の長髪に赤のリボンをしている

「死ねええええ！！輝夜あああ！」

「そっちが死ねええええええ！妹紅おおおお！」

……こりや、仲が悪いつて規模じゃねえな
 どんだけ犬猿の仲なんだよ……
 取り敢えず……見付からないように……突破……

「どこ行くの？ 夜哉」

「いや…だから、突破を」

「あなたが行きなさいよ。反射の能力の練習を兼ねて」

襟首を掴まれ、あろうことか敵陣の真ん中になげとばされた魔理沙ですら「それはないぜ…」と呟いた

「嫌だあああああ!!」

…俺、咲魔の奴隷じゃないんだがな…

半泣きになりながらダイナミックにずっこけた

輝夜^{かぐや}と妹紅^{もこう}と呼ばれた女の子はギロリと俺を睨んだ

「あ…あはは…あはははは」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!死ぬって死ぬって死ぬってえええ!!

いやいやいやいや、明らかに殺すつもりだよな?俺を

「妹紅、続きはこの不屈き者を灰にしてからにするわよ」

「ああ、そうだな」

ひいひいひいっ!?

ヤバイヤバイ!!殺人者人ときは実感わかなくて逆に落ち着いてたけど、今は死の実感有りすぎてマジでリアルにヤバいって!!

「さ……咲魔あ……。酷い……」

だが、咲魔は厳しい眼差しで俺を睨むだけ……隣で魔理沙がおろおろとしている

「灰にしてあげる」

輝夜が宙に浮いた

背後からは大量の弾幕を展開した

大量の弾幕が迫ってくる。威力は既に検証済み。しかも、恐怖で体が動かないし、動けたとしてもかなりのスピードの弾幕が、俺自慢の脚力と反射神経をもってしても、無理だ

だが、内に眠っていた夜哉の本能が灰になることを許さなかった目の前に弾幕が迫ったとき、急に頭が冷たくなるのを感じた

——あ、……一緒だ……。なんだ、簡単な事だ。

夜哉にはもう高速の弾ではなく、本当にゆっくりとした弾道が見えていた

超高速でホルダーからコンバットナイフを抜いた

——こんなもの、恐るるに足らない……壊してしまえばいいんだ

「やっとやる気になったわね。属性付加《氷》」

——アア、ソウカ。コノオンナハ、オレヲカクセイサセルタメニ

ワザトシタノカ。

冷気を帯びたナイフが熱を帯びた弾幕を弾いていく

「咲魔、後で殴る」

「ご自由に」

どんどん弾幕を弾く

「なっ！？コイツ！！」

弾幕のパターンは理解した
後は突っ切るだけ：

「ちっ！！スぺルカード！」

輝夜は一枚の札を掲げた

フリリアントドラゴンバレッタ
「神宝！」

光輝くレーザーを放物線状にばら蒔いて、色とりどりの弾幕を配置
するというようだが、先ほどの弾幕と違い、レーザーは破壊出来そ
うにない

だが、これくらいはパターンを見なくても楽勝：

だが、…………

「不死《火の鳥—鳳翼天翔—》」

妹紅と一緒にスペルカードを発動する

———なんだ、コイツら案外仲が良いのか

だが、弾幕はギリギリでも避けれる程度に配置してほしいものだ
如何せん地上にいるからな。避けれるものも避けれない

———なら、飛べばいい

ああ、飛べばいい

「「なっ!?!」」

やはり仲が良いじゃないか

因みに原理は、重力の俺に与える力の向きをベクトルを操り、変換
させて原動力とする。加速や減速は反射の能力の応用でやっている
だけだ。なんの難しいことはない

俺は、トップスピードを維持したまま旋回、接近し、…………

「歯を食い縛れ」

「「え?」」

殴った

ふっかーっ!! (後書き)

妹紅たん可愛いよ妹紅たん

人里と曝露（前書き）

長らくお待たせして申し訳ない…（え？待ってない？）

ええと、完全に後半がシリアスになりました…ごめんなさい。コメ
ディは何処へやら（遠い目）

では、どぞ！！

※なんか、急展開の模様

人里と曝露

夜哉 side

「道のと真ん中で暴れるのは善くないよな？」

「「……はい」」

「これだけの火力だと、近くを通る奴に死傷者が出てもおかしくな
いってこと、わかるか？」

「「……すみません」」

「事実、お前らは俺を襲ってきた訳で、危うく黒焦げになる所だっ
たよな？ふじわらのもこう 藤原妹紅」

「ごめんなさい…」

「素直でよろしい。お前もだぞ？ほうらいさん かぐや 蓬萊山輝夜」

「こ…心に刻みます」

絶賛俺の超スマイルで説教中だ。

なんでも、和服黒髪の輝夜と白髪紅白モンペの妹紅は、古くからの
犬猿の仲らしい…いや、仲悪すぎるだろう…。

しかし、二人仲良く正座して俺の説教を真面目に受けているのは、
つい先程、咲魔が、通称『スーパードハナシタイム』なる秘技を使
ったからだ。

何やら、空間を裂いて（歪曲空間と言うらしい）、二人を連れ込んで、数分して出てきたら二人ともスッゴい泣いてた……いや、その前に裂け目から悲鳴が…。

それからというものの、二人がずっと「ごめんなさい」を連呼するようになった。

何があったのか聞いてもまた瞼に涙を浮かべて首を左右に全力で振るだけだった…。なにこれ怖い。

「夜哉、それくらいにしとくわよ。早く現世に戻らないと…」

紅の大鎌を担いだ咲魔の姿を確認すると、輝夜と妹紅は震え出した

「そ……そうだな。魔理沙、案内頼む」

「わ…わかったんだぜ」

終始棒立ちだった魔理沙はかなり引きつった愛想笑いをした

魔理沙と夜哉は、この時、「咲魔だけは敵にしたくない…」と、内心かなり引いていた

ん、ちょっと待て。歪曲空間ってなんだ！驚かない俺はおかしいぞ！！

「咲魔、歪曲空間って何ぞ？」

「簡単に言うと、三次元空間の外側にある空間よ。Aフォトンっていう物質で創れるんだけどね。私が創った武器を出し入れするのに使ってるわ。まあ、ナノトランサーってデバイスで武器をナノトランス…粒子化しながら歪曲空間を挟み開けて収納してる。実質上無

限になんでも容れれる」

「……さっぱりわからん」

「わかったら逆におかしいわ。夜哉はもともと人間界…現世側だから科学的に非常識だしね」

なんか…見限られた感満載なんだが…。わからないものはしょうがない…つつつたら教師志望の名が廃るからちゃんと勉強するよ、うん。

「咲魔」

「ん？なによ」

「疲れた」

「あ、こんなところに毒キノコが…」

「ごめんなさい…ちゃんと飛びます」

スッゴい笑顔で脅されましたよ少女に…

少女に脅される成人男性って…結構笑えないな

ま、目の前の少女は怪物だから仕方ないっちゃ仕方な

「夜哉、今失礼なこと考えてた？」

「滅相もございません」

読心術はお手の物ってか？笑えねー。

かれこれ言いつつ空を抵抗なく飛んでる俺は段々常識はずれな気がするんだが。

考えても仕方ないな。

「いいえ、考えるべきよ夜哉」

だから心を読むなよ…。

「と、いうと？」

「あなたは既に人間じゃないから」

「は？」

「魔力の適合性が異常に高いわね。妖精とか小妖怪とかそんなちやちなものじゃないわ」

「なんですとおおお！？」

「教師に成ろうなんて諦めなさい」

「うう…仕打ちがひどえよ…」

俺はorz状態のまま飛行していった
なかなか器用だと咲魔に誉められたけどなんも嬉しくないからな
！！

さて、迷いの森から飛ぶこと数分。民家らしきものが見えてきた…

が…

「え？江戸時代？」

外観は江戸時代の城下町ってところだ。俺の居た時代とはかけはなれた風貌をしている。だからと言って嫌ではなく、逆に都会に住んでいた俺にとっては気持ちがいいほど空気が美味しい…。

「エドジダイ？なんだ？それは…これが幻想郷の普通の街並みなんだが」

魔理沙が首を傾げる

「ここが幻想郷…。噂には聞いていたけど、まさか本当にあるなんてね」

咲魔が感慨を込めて言った

「え？咲魔しってんの！？」

「ええ。仲間とのリサーチで、現世から隔離された空間があることに薄々気づいてはいたわ。……………」

咲魔は溜め息をはいた。

俺は人間観察が得意なんだが、咲魔が溜め息をはく時は決まって難しい顔をしたり、虚空を見詰める。

ヒトにありがちだが、溜め息をはいて虚空を見詰めるときは、考え事があるときだ。

「どうか…したのか？咲魔」

「え?…あっ…ああ、いや別に…」

かなり慌てる咲魔。

「こ…ここで話すようなことじゃない…から」

徐々に落ちていく声のボリューム
いよいよなんかあるな…

「ここじゃ無ければ良いんだな?よし、魔理沙」

魔理沙は頷いて、進路を変える。

「あ、ちよっ…ちよつと…夜哉」

相変わらず幻想郷の日差しは暖かく降り注いでいる。

咲魔はもうつ向いていて、座り込んでしまった。

俺が考えるに、なんだかんだで俺を仕向ける理由があると確信していた。

「咲魔、俺を仕向ける理由があるんだろう?」

咲魔はうつ向いたまま頷いた。

「なんか、あるんだな。…連れ出して悪いな咲魔。ごめん。確認がしたかっただけだ。行こうぜ」

俺は踵を返した

「まっ…まっでよ…夜哉。…話すよ」

「いいのか？魔理沙も居るし、言いたくないなら…「構わないわ」…そうか」

珍しい咲魔の気遣いで、丸太の椅子が並べられた。

こいつはいよいよなんかあるぞ…

「えっ…ええと、なんか重要なことみたいだけど、私も居ていいのか？ちよつと恐縮というか、なんというか」

魔理沙もオロオロしているが、咲魔の話には興味を示しているようだ。

顔を上げた咲魔の下瞼には涙が一粒着いていた。

「いいのよ魔理沙。それより、私は夜哉に謝らないといけない…」

椅子を引いて咲魔は立ち上がった

「あなたの能力の高さにつけこんで、あなたを利用しようと目論んでいたことに謝罪をするわ…。本当に…ごめんなさい」

あろうことか、プライドが高い咲魔が人に深々と頭を下げるどころか、地に両手をついて土下座をしたのだ…

「頭を上げてくれよ咲魔。別に、俺はどうも思っちゃいないし、むしろ殺人者から逃げられたのは咲魔のお陰だよ。むしろ感謝してる」

彼女は、少し顔を上げると、フルフルと頭を横に降った。

「…あの時、実は殺人者から追い回されて死にそうだったの……そこに夜哉が来たから、助けられたのは私の方なの…」

「でも、咲魔はそんなとき満身創痍だったろ？それで二人相手は凄いのと思うぞ。で、咲魔は殺人者はじめ《異端狩り》に因縁があるんじゃないのか？」

咲魔は驚いたように顔を上げた。

「察しが…いいわね……」

咲魔は一拍置いて話し始めた。

「私は、何度も《異端狩り》に乗り込もうとして逃げ帰ってきたわ。何度も何度もね。あのね、私の友達が異端狩りにやられちゃったの」

「やられたって…殺されたのか!？」

「いえ、あの子達は死なないから。捕らえられてる…そこでどんな扱いを受けてるか……」

はあ。て咲魔は溜め息をはいた。つまりこういうことだろう。《異端狩り》なる集団に仲間達を捕らえられて、どうにかして自分だけ助かった。何回も《異端狩り》と交戦し、敗北。逃げ帰ったところで俺と遭遇。俺が能力者ということが発覚。協力してもらう為に修行をさせてたわけか。

「なんだ、そんなことか」

「そ、そんなことって。あんたねえ…」

「なにも理由を隠す必要はねえだろ？ 咲魔は恩人であることには変わり無いし、今は仲間だからな」

そのときの俺は、笑っていた。

咲魔は、顔を上げて驚いた顔をする。

「い…いいの？ 私は、夜哉を裏切ったのよ？」

俺は笑顔をつくって手をさしのべた。

「悪いもクソもあるかよ阿呆。仲間なら、俺にも頼れよ、咲魔」

「そうだが、まあ、事情はあんま飲み込めないけど、私も力になるぜ！！」

咲魔は顔を歪めた。直後、大粒の涙が頬を伝い、溢れ落ちた。拭っても拭っても、次から次へ溢れ落ちる。

「うつ……バカ……なんで、……なんでこんな……」

嗚咽が止まらなくなる。

必死で溢れる涙を拭いながら咲魔は言った。

「ありが……とう。魔理沙……バカ夜哉……」

最後まで俺の扱いはこうなんだな…。

まあ、咲魔らしくて良いけどな。

俺たちは、咲魔が泣き止むのを待って、人里に入って行った。

人里と曝露（後書き）

急展開申し訳ないっす！！（ズサアアア）orz

では、次回はまた後程

博麗神社と白黒紅白（前書き）

ふひー、スペルカード戦を初めて描きましたが、どうだろうか…。

博麗神社と白黒紅白

夜哉 side

ここは幻想郷。

魔理沙が言うには、夢と現^{うつ}の境界を結界で隔離した場所らしい。幻想郷には、現で忘れさられたモノや、妖怪、人間が流れ着く場所だという。

俺らは…違うよなあ…。流れ着くにはほど遠いもんな…。魔理沙に聞くと「紫^{ゆかり}の仕業だと思うぜ」と言ってた。紫って誰だよ…。

まあ、言っても仕方ないか…。

因みに、俺は魔理沙と咲魔の二人がかりで解析されたけど、結果は口々に『よくわからん』だそうだ。

まあ、『よくわからないモノ』という認識で悪くはないな。

日本の昔話に鵺という同じような類いの妖怪が居るから、てっきりそれかと思って訊ねたら、どうやら違うらしい。

わけわかんねー。仕方ないな。

「そういえば、言ってなかったな」

魔理沙はクルツと向きを変えると、ニツコリと笑顔をつくった

「ようこそ、幻想郷へ！！歓迎するぜ！」

「おう、よろしくな魔理沙。」

「ん。」

咲魔は泣き顔が見られたのが恥ずかしいのか、さっきから膨れっ面である。

「そういえば夜哉、お前、疲れたって言ってたな。私のお気に入り茶屋紹介するぜ。」

「わりいな…あー、金持ってない…。」

「何いってんだ。おごってやるんだぜ？」

魔理沙は笑顔で言った。

うむ、申し訳ない気がするけど、断るのも忍びないしな。

「あ、すまん。お言葉に甘えて。」

「……ありがとう。」

ううむ、それにしても町並みが時代劇みたいだな…。

でも、悪くはない。空気が美味しいしな。

そんなこんなで魔理沙に連れられて歩いていくと、なかなか雰囲気纏ったお茶屋に着いた。

「着いたんだぜ。」

入っていくと、やはり和風の、控えめな雰囲気を出している内装であった。

魔理沙の服装が全然店の雰囲気にあっていないのはご愛敬なのだろ

う。

和風に魔法使い（洋風）とは、かなりのハイセンスだと思うんだな。

メニューを開いてみる。

……どうやら、和風という先天的イメージは廃止しなければならな
いようだ。

何気なく眼に止まったのは、『珈琲』……。どうやら、和風と見せ
かけていい感じに洋風も合わせてみたぜキリッ！！……的な考えが店
主（もう、マスターで良いと思う。）にあるようだ。
大体、珈琲はどこから仕入れるのだろうか。疑問だ。

更にランチまで着いているセットがあるようだ。

これは茶屋ちややではない。茶屋カフェである。

俺は朝御飯（食べない奴は只の阿呆だ。）を食べていないので、ク
ラブハウスサンド（もうそのままカフェでいいよ。）と黒珈琲ブラックコーヒーのセ
ットを頼んだ。

そういえば、今思ったのだが、先程、魔理沙の服装が全然店の雰囲気
にあっていないと言ったが、魔理沙だけではない。俺は、赤のパ
ーカーにジーンズ。咲魔に至っては、ゴスロリとしか言い様の無い
ドレスである。つまり、

「雰囲気ってなんなんだろうな。」

「なんか言ったか？」

「いや、何でもないよ。」

おっと、口に出ていたようだ。自重しなければ。

因みに、魔理沙は餡団子と抹茶のセット。咲魔は牡丹餅とミルクティーという素晴らしい組合せだ。

「おお、旨いなこれ。」

「だろ？ここの茶屋は最高なんだぜ！！」

「魔理沙、これ茶屋違う。カフェだよ。」

「それもそうだ。」

ううむ、それにしてもミスマッチだよなーいろいろと。

「あああああっ！！」

「のあっ！？」

いきなり魔理沙がテーブルに手をついて大声をあげた。

熱々のブラックコーヒーを手に浴びながらそれでもコーヒーの進行を止めた俺は誉められるべき。

でも熱い…壮絶に熱い…。

「今日は博麗神社はくれいじんじやの宴会なんだぜ！！忘れてたぜ！」

「それがどうかしたのか？」

「いやー、酒樽頼んでたの持っていかなきゃ行けないの忘れてたぜ…。悪いけど、手伝ってくれ。」

「おう。俺はいいぜ。……咲魔は？」

「構わないわ。」

素っ気ねー。ノリわりー。

魔理沙がおごってくれたのに礼を言くと、目的の酒樽を注文したという酒屋に向かった。

酒といえば、俺はそこそこ呑める方だ。というか、二十歳になってから成人式で呑んだとき、みんなぶっ倒れてたけど、俺だけ生きてたって伝説をつくったから結構酒豪だとは自負してる。

「おっちゃーん！！神社の宴会のお使いなんだぜー！！」

魔理沙が元気良く挨拶すると、酒屋の店主らしき中年のおっちゃんが奥から出てきた。

「おうおう、また魔理沙ちゃんかい。よう来るのう……。それと……見ねえ顔だな。」

「初めまして。秋吉夜哉と言います。昨日幻想入りしたばかりなんです。」

「……宇都宮咲魔。」

おーい、咲魔さーん。自己紹介くらいしよーよ。

「ほう。幻想入りしたばかりか……お前さん、よく死ななかったな。」

ん？ どういう…。

「なあに、大抵幻想入りしたばかりの外の連中は妖怪に食われて死ぬ奴が多いからな。」

「ああ、二、三回死にかけましたね。」

主に咲魔に殴られ続けた俺とか、な。

「大丈夫だぞおっちゃん。コイツらは強いからな。んじゃ、酒樽貰っていくぜ。」

「おう、毎度！！」

酒樽はもやしの俺には重たすぎたようだ…。

仕方ないから能力で重力の方向を半分上方向に変換して±0にする。

うーむ、能力の扱いにも多少慣れてきたな…。

調子こいて二つ頂戴した酒樽を二つとも片手で持っていた。

当然魔力容量はギリギリなんで…飛べない。

「石段なげええええええ！！」

絶賛心臓破りの石段を全力疾走中。

なぜ全力疾走かって？簡単だ。DS女と普通の魔法使いが調度全力疾走しないとついていけないスピードで先行するからだ。

「ま…魔理沙……。箒に乗せてくれ…。」

「駄目よ。」

「ちょっ!?!なんで咲魔が応えんだよ…。ちくしょおお!!!」

とはいえ、酒樽自体重さが無に等しい上に超絶スピードで走ってるから神社までもうすぐである。

「つ…着いたぜ畜生。…ゼエ…ゼエ。」

も…もやしっ子嘗めんなよ…はぁ…はぁ…。

「一番下から十分とちよっとなって所ね。まあまあ頑張ったじゃない?」

おお、咲魔がスポーツドリンクをくれた。しかもキンキンに冷えてなくてぬるめってのもやけに気遣いだ。

「べ…べつに、他意はないわよ…。」

「ん?何の事だ?」

「なんでもない!!!」

うおっ!?!なんかキレたぞ。俺、なんか変なこと言ったのか?

少しその場で休憩して、少し歩くと、鳥居が見えてきた。

奥には、普通に立派な神社が建っている。

「おい、霊夢ー！酒持ってきたんだぜ！！」

……。霊夢とは、縁側で昼寝してる巫女みたいな少女だろうか……。それにしても、凄い巫女装束だな……。肩だしだの紅白だのリボンだの……。ポニテだの。アニメとかマンガとかの巫女みたいだな。

魔理沙は我が物顔でズイズイと神社に入っていく。

魔法使いが来る神社というのなかなかシュールだな……。

「れーいーむー！！おーきーろー！」

「うるさい魔理沙……。」

……。巫女さんは眼を醒ますと同時に御札を魔理沙の額にぶつけた。凄まじい反応速度だ……。てか、御札が当たった所若干赤いぞ！？御札にそんな質量があるのか！？

「で、誰？」

巫女さんはジト目で俺と咲魔を見た

「俺は、秋吉夜哉。元普通の人間。んでコイツが連れの宇都宮咲魔だ。よろしくな、巫女さん。」

「新入り？……まったく、紫のせい……。私は博麗^{はくれい}霊夢^{れいむ}。一応博麗大結界の管理人。」

博麗大結界とは、夢と現を切り離す大規模な結界だと魔理沙は言っていた。

すると霊夢は俺達を見て言った。

「で、どうすんの？帰りたいの？あんたたちは。」

帰りたいって…やっぱ現世だろうか。

「んー、予定は無いけど。咲魔は？」

「ここも現世むじうも変わらないわ。」

「だそうだ。今ん所帰る予定はないぜ。」

「…あきれた。大体の渡来人は帰りがるのに…。ま、面倒くさく無いからいいんだけどね。どうせ帰れないんだし。」

帰れないのかよ！

いや、魔理沙から帰れないかもしれないとは聞いてたけどよ…。

「で、魔理沙。あんたは何だっけ？」

「だから、酒を持ってきたんだぜ。それと、…」

魔理沙はポケットからスペルカードを出した。

「スペルカード戦やろうぜ！！」

笑顔満開の魔理沙に対して面倒くさそうな霊夢。

コイツ…相当面倒くさがりだな…。

「いいけど…。スペルカードは三枚までね。」

「やったぜ！！！」

魔理沙は箒に跨がり、霊夢はそのままフワッと飛び上がった。

「先手必勝！！！イベントホライズン黒魔！！！」

魔理沙の周りに螺旋状に、赤、橙、青、緑、黄の弾幕が形成される。螺旋状といっても、拡散したり、収縮したりとカラフルで綺麗な弾幕である。

しかし、霊夢の後ろにも前にも弾幕が形成されているので、距離はとれないのだ。

一方の霊夢は、……人を小馬鹿にしてるってくらい涼しげな顔でそれらを避けている。時には余裕こいて自らかすっている（これをグレイズというらしい）。

螺旋状でカラフルな弾幕は、限界時間に近づいているようだ（スペルカードは限界時間が設定されている）。

魔理沙は躊躇わずに二枚目のスペルカードを取り出した。

ミルキーウェイ
「魔符！」

星形弾幕が形成される。

螺旋回転する大型の弾幕である。

魔理沙がいったが、これは嫌われがちなスペルであるが、大気中の星成分（なんじゃそりゃ…。）の強さに左右されるから決め手にはならないらしい。

霊夢は言わずともがな涼しげな顔で淡々と避けている。しかもまだスペルカードは未使用なので、やはり魔理沙を馬鹿にしてるようにしか見えない。

先程から霊夢が投げる御札はホーミングするらしく、魔理沙は必死に避けている。
才能の差とやらだ。

「あたれー！」

「嫌だ。魔理沙の星ってなんか尖ってるし。」

理由はともかくとして…。

結局またしてもスペルカードの限界時間に達したようだ。

「ラストスペルなんだぜ！！いけっ、マスタースパーク恋符！！！」

魔理沙曰く「弹幕はパワーだぜ！！」らしい。

極太のレーザーを、帽子の中に入れているマジックアイテム『ミニ八卦炉』を媒体にして、撃っているらしい。

因みに同時にばら蒔かれる星形弹幕はミルキーウェイと同じ原理らしい。なるほど、わからん。

しかし、霊夢はこのスペルカードも避けて終わるのだろうか。幾らなんでも興ざめである。

と、霊夢は一枚のスペルカードと言う名の伝家の宝刀を抜いた。

「神霊《夢想封印》。」

巨大な光が魔理沙のマスタースパークを潰していく。

夢想封印と言うくらいだからスペルカードを封印でもするのだろうか。どちらにしても、痛そうである。

当たりたくは…ないよなあ…。

「いってえ!!」

あ、魔理沙が被弾した。

博麗神社と白黒紅白（後書き）

あー、やっと終わったー。ネタがないよう

酒宴（前書き）

なんか、こればかり投稿しててすいままそん。
だって東方好きだもの。

酒宴

夜哉 side

「負けたんだぜ…。」

魔理沙は夢想封印でボロボロになった服を魔法で元通りに直すと、涙目で俺によつてきた。

いや、ありゃ仕方ないだろう。霊夢とは素人目で見ても実力の差が…ねえ。

魔理沙の頭を撫でてやると、「あう…。」と言葉になってない声を発した。

で、今チラッと咲魔の方を向いて、目があった。そっぽを向かれたのは気のせいだろうか。

「あう…。夜哉…。弾幕はパワーなんだぜ…。」

「おう。そうだな。」

ナデナデ

ゴスッ

「あ、あのー、咲魔さん？」

真横から強烈な殺気を感じたから反射的に魔力を収縮させて、（咲魔から魔力の扱い方を習った。）防御した。幸い魔力を纏った打突では無かったが、痛い…超痛い。

でも、ちょっとした反復練習で魔力の扱いを少しだけマスターした俺
凄くね？え？凄くない？orz

「ふんっ!!」

えーと、凄く不機嫌そうな小動物（と書いて怪物と呼ぶので悪し
からず。）をどう扱っていいものか…。

「……今のやり取りで夜哉のデリカシーの無さがわかったわ。」

霊夢が溜め息混じりに言った。オイオイオイ、なんの話だなんの。

「私も前々からコイツは鈍感すぎるとは思っていたんだが…まさか、
ここまでとは思わなかったぜ。」

魔理沙からは見限られた感満載なんだけど…。

どういうこと？

いつの間にか夕焼けがやたら綺麗な時間帯になっていた。

一頻り雑談をすると、霊夢が宴会の準備をすると、家のなかに入っ
ていった。

どうやら、宴会にはたくさんの人誘ってあるらしい。

大半は魔理沙が誘ったというが…。

で、その間俺は何をしているかというと、剣術および格闘術の稽古
をしてる。無論、相手は咲魔である。

ナイフでは少し心もとないし、どうしたものかと思っていた所であ
った。

結局は片手剣に丸くおさまった。

場合によっては空いた左手で銃や、スタングレネードなどが簡単に扱えるかららしい。

因みに、剣は咲魔がくれた物で、銘を《赤桜・弐式》という。

紅色の刀身で、片刃の剣である。

幅は四寸、長さは二尺余り。

咲魔曰く、剣そのものに意思があるから、自動で使用者に最適化するという。

剣術は剣から頭に叩き込まれるし、俺には戦闘センスがあるらしい（いや、ぜってえ無いだろ。）から心配は無用だと言う。

そんなこんなで勝手に強くなるから稽古は実戦。

勿論咲魔さんは大鎌を振りかぶってきます。誠にありがとうございます。

「踏み込みが浅い。」

鎌の柄で喉元を突かれた。

痛すぎて声がでません…。

地面に平伏すること計二十回。俺の薄っぺらで仮名用半紙程度の驚きの薄さのプライドは消滅しました。てか、ボロボロで立てません。

「いっ……だ…この。」

「ほら、立ちなさい。もう一回。」

鬼畜なことに、ボロボロになるたびに回復魔術で治される……全快じゃないところがミソだな。

「くそつたれ…次は泣かしてやる…。」

踏み込みと同時に縦斬り。

最初は怪我させたら嫌だと思ったけど、今はそんなことどうでもいい。なんかコイツを地面にへばりつかせてやるまで気が済まん。

「へえ、さつきより重いわね。」

大鎌で受け止められる。

左手で腰のホルスターからファイブセブンを抜いて至近距離から発砲する。

「おっと。危ない危ない。」

体を捻って弾丸を避けると、遠心力で鎌を薙ぎ払った。

右方向から来た。

「かかったな!!」

右手には籠手…《全反射の籠手》が装備されてあった。

質量的には大鎌に劣るが、コイツはなんでも跳ね返す籠手だ。アイアスの盾にも負けない…と思う。

案の定、鎌は弾かれ、咲魔の手元には武器が無い。

「そら、お返しだ!!」

踏み込み、袈裟斬りを放つ。

だが俺は見た。咲魔が凶暴な笑みを浮かべる瞬間を。

「甘い。」

腕を捕まれたと思った後の祭り。一切エネルギーの無駄がなく、利用し、返す手で俺を地面に叩きつけた。

うつ伏せになった俺の上に乗っかり、武装を解除すると……ヘッドロックをかけてきた。

「そうら、いーち、にー、さーん、……。」

「ギブギブギブギブ!! ウーマンリブ!!」

してやったり。とニヤリと俺を見つめた。因みに、俺は涙目。

「武装解除までは良かったんだけどね。さて、陽も落ちてきたし、今日は終わりね。」

今日は?……てことは毎日続くのか? なん……だと!?

さてさて、陽も落ちてきたところで、なにやらゾロゾロと人が集まってきた。そういえば、宴会だったな。

ん? 気のせいかな? 女子率高くねえ? 男女比偏ってねえ?

気のせい……じゃないよな……。orz

あ、永淋さんと鈴仙さんだー。知ってる人だー。わほーい。

「あ、夜哉。無事に辿り着けたんだ。」

なんぞ？と思って振り向くと、アリスが居た。

「お陰さまでな。それにしても、アリスも宴会に来るんだな。」

「まあ、魔理沙から誘われたしね。お酒も悪くないかなって。」

ゴスッ

はい、予備動作ありませんでしたよ。ありがとうございました。え、何を怒ってるの？咲魔さん。

「あ、大変そうね。でも、回復したみたいで何より。」

アリスがクスリと笑って言った。

すると、咲魔がちょこんと前に歩み出た。

「そ…その……。世話になったわ……。」

なにこの可愛い小動物（と書くが実は凶暴。）

俺が変質者だったらお持ち帰りレヴェルじゃね？

「いえいえ、礼には及ばないわ。上海。」

上海と呼ばれた人形がふよふよとこっちに向かってきた。なにやら籠を抱えている。

「これ、私の手作りクッキーの詰め合わせ。良かったらどうぞ。」

おお、旨そうだ。ココアとバターの詰め合わせみたいだな。因みに、どちらも好きだが俺はバター派だ。いいよな、あの香ばしいのが。

「おう、サンキュな。」

「あ、ありがとう。」

アリスは微笑むと「どういたしまして。」と言った。

「さて、宴会も始まったし、魔理沙さんところ行くわ。じゃあまた。」

アリスに手を振った。

アリスと別れて咲魔と二人でいる。なぜか上機嫌な咲魔であるのだが…。なんか感情の起伏激しくないか？大丈夫か？

不意に後ろから気配がした。しかし、近寄ってきた気配はしなかった…。

なんか、異様な威圧感があるんだけど…。

「ふふっ…：そうビクビクしないで。私は挨拶に来ただけだから。」

振り向くと、紫色の服に、リボン付きの帽子を被った金髪の女性が居た。扇子を広げて上品ににこにこ笑っているが、何故だか胡散臭く感じてしまう。

「誰？アンタ。知らない顔。」

咲魔が敵意全開で睨み付けるが、涼しげな顔で笑みを崩さない。

「八雲紫やくもゆかりと言えは解る？」

「ああ、噂の紫サンね。一般人を妖怪だらけの世界に放り込むことで有名な。」

皮肉たっぷりな俺の言葉もかるく流された。

「で、なんの用だ？」

「うふふ。単なるご挨拶よ。深い意味は無いわ。」

「なら消えて。」

それは言い過ぎだと思うが、そのプレッシャー出すのは止めてほしい。

「紫様!!どこをほつつき歩いてるんですか。って、あ。」

「あ、玉藻前。……じゃなくてバカ狐。」

ん？友達？珍しい。

「わざと言い直すなわざと!!それに、今の名は八雲藍やくもらんだ。」

「咲魔、知り合いか？」

「何年間前に会った駄狐。王朝支配してた九尾の駄狐こと玉藻前。」

「ああ、玉藻前ってあの玉藻前ね。……咲魔、お前何歳だ？」

「数えるのは諦めたわ。」

さいですか。

つまり、すごく歳上ですな。

「駄狐ではないっ！！……はあ、どうしてこの少女と喋ると気疲れするのだ……」

「ぐうう…人が気にしてるのを知ってて…この駄狐…」

気にしてたのかよ。

それにしても、仲が良さそうで何よりだ。

「藍さん…で良いのか？俺は、秋吉夜哉。咲魔の連れだ。よろしくな。」

「ああ、よろしく。それにしても、よくこんな奴とつるむよなお前も。」

俺は苦笑で応えた。

……藍さんの後ろに黒い影が…。

咲魔…なにやってんの…。

咲魔はそっと尻尾に手を伸ばすと、思いっきり握った。

「ひゃあああっ!？」

「ほう、未だにここが弱いのか玉藻。」

「わあ……わかったから…掴むのはよせ…ひゃうっ!!」

「よせ? 止めてくださいと懇願したら止めてあげるわ。」

鬼がいる。てか、見てらんねーから。俺からも止めること頼みたい。色々と危ない。色々と。

「んあっ…ふう……ゆ、許して…くだしやい…。」

「よかろう。」

やっと止めてくれた。男として、あんなもん見せられたら理性とかそこいらへんがちよつと危ない。

だって仕方ないじゃん。顔が赤くなってなんか喘いでるじゃん!! なんかエロいじゃん!!

「夜哉、しょうもないこと考えてるでしょ?」

「滅相もない。」

さてさて、宴会も盛り上がり出しました。

確かに女の子だらけの宴会も眼の保養にはなるが、居づらい。すっごい居づらい。

結局ふらふらするのは疲れるから、咲魔と霊夢が居るところで酒を呑んでるだけ。日本酒しか無いけどな。

それにしても、みんな酒豪だよな…。俺もそれなりに自負してたけど、霊夢も咲魔も酔わねえもん。

「おろ? 霊夢、なんか楽しそうだな。」

ん？今どこから声がしたんだ？
振り向いても誰も居ないし、かといって目の前にも居ないし気配も
しない。

「姿を現しなさい、萃香。」

途端に、霧みたいなものが集まりだして、人の形になっていった…。
ん？角？なら妖怪の類いか？

どうでも良いけど、神聖な神社に妖怪が集まるってシュールだよな。

「ああ、ごめんごめん。私の名前は伊吹萃香^{いぶきすいか}。鬼だ。初めましてだ
な、秋吉夜哉。」

「え？俺名前教えたっけ？」

「気にすんなって。なあ、咲魔。」

「酒臭い。」

コイツら知り合いなのか？俺の知らないうちに…。

「夜哉、この鬼は《密度を操る程度有能力》を持ってるわ。」

萃香は笑って瓢箪（多分酒が入ってる。酒池肉林って書いてあるし）
を傾けた。

密度…んー。あ、そうか、自分の体の密度を低くして幻想郷中には
蒔くからか。なるほど理解。

じゃあ、俺達が幻想入りした瞬間からコイツは知ってるのか。

「まあまあ、そう言うなって咲魔。仲良くしようよ。」

因みに、萃香の角は二本で、髪は橙色である。

ううむ、鬼だけに怪力だろうな。咲魔も怪力だろうし。怪力同盟？
洒落にならないぜ、マジで。

あー、今日は月が綺麗だ。

宴会の盛り上がりがピークに達している時だった。

ドォーン！！

酒宴のど真ん中に轟音が鳴り響いた……。

酒宴（後書き）

玉藻前って言って知ってますかね？あ、知らない？
いつかキャラ紹介するんで（汗）

それと、東方キャラは設定があんまりないから僕の妄想ですが、それでもok？

愚者―ザ・フール―（前書き）

あい、いきなりのシリアス展開です。

正直、戦闘シーンをなんとか長く伸ばしたいとか、試行錯誤しますが…。初戦だから若干無双しますがご愛敬。

あと、卑猥な台詞が出てきますんで、ご愛敬（笑）
嫌な方は回れ右してダッシュダッシュWW

愚者―ザ・フール―

夜哉 side

突然の爆音に、勿論宴会にいた全ての人、妖怪が振り向いた。頭の働く奴は、小妖怪や、人間を避難させている。動きが素早い連中である。

ユラリ…と、砂塵の中から人影が見えた。影からして、少女である。

腰の辺りまで長髪が伸びている。右手には西洋剣。

「やーっと、みいつけた。これ以上、僕の手を煩わせないで下さいね。殺戮人形姫に秋吉夜哉。幻想郷に入るのに苦労しましたから。」

「ちいっ……お前かよ。殺人者。」

「それは僕達の総称です。僕はタロットの零番目、《愚者^{ザ・フール}》です。」

《全反射の籠手》を左腕に装着し、腰の《赤桜・弑式》に手を伸ばした。

総称です…か。つうことは、まだ何人も居ることになるな…。厄介だ…。咲魔が全快してるとはいえ、どこまで強いかな…。

「咲魔、小妖怪どもの避難は完了した。」

「流石玉藻ね。いい仕事。」

「あー、嘗めないでもらえます？僕、こう見えて結構強いですよ。そこのお二人だけで戦うんですか？」

自画自賛とはこのことだろうか。アイツが愚者と謂われる所以が少し見えた気がする。

でも、確かに二人では危険だよな。何人に分身されるか解んないしな。

「嘗めるな愚者。こちらが貴様の一人や二人、苦勞しないわ。自画自賛も甚だしい。」

「言いますねー。てか、回復してるってことは、あのゲテモノ解毒薬飲んだんですか？それはそれは傑作ですね。……、ああ、傑作といえ、昨日は腹いせに、シャルロッテさんと遊んだんですよ。あれは傑作だったなあ。」

瞬間、咲魔のプレッシャーが増大する。

慌てて霊夢が結界をはった。相変わらず涼しい顔をしているのだが。

「アンタ、シャルに何をした。」

愚者はニヤニヤしながら楽しそうに応える。

「ふふふっ……。一人だけ逃げた身でよく仲間の心配ができますね。まあ、関係ないですね。」

「何をしたと聞いているわ！！愚者！」

更にプレッシャーが増大し、結界が震えている。

「そおですね。拷問の一通りに、恥辱、凌辱も一通り。更に死にま
せんから殺し放題ですね。いやあ、シャルロッテさんは、鳴き声が
可愛いですね。」

狂ってやがる…。

こんなに狂ってる奴は初めて見たが、こうまで狂えるもんなんだな、
人間って。

俺は人間じゃないけどよ。

「殺す……。愚者、貴様を！」

「あれえ？怒りすぎじゃないですか？確かに、男どもが強姦してま
したが、処女は大丈夫みたいですね。

それにしても、シャルロッテさんって、あんなにエロい声出せるん
ですね。

可愛すぎて、危うく壊しちゃうとこでした。」

咲魔は紅の鎌と漆黒の鎌を携える。鋭い眼光は愚者に向けられてい
る。

「死ね！！」

直後に咲魔は地面を蹴った。

愚者は、ただ西洋剣を右手で持っているだけである。

更に咲魔の鎌は、《刈り取る死痛の二つ鎌》であり、断ち切る――
即ち、触れたものは何でも断ち切る概念をもつ概念武装である。
だが、愚者は片手で二つの鎌を受け止めた。

「殺戮人形姫はノーキンのようですね。残念です。一番の不安因子

に対して私達が何の対策もなく挑んでくると思ってるんですか？これだから異端者は……。」

受け止めたまま西洋剣を横に一閃する。

たったそれだけの動作で咲魔は吹っ飛んだ。

「あ、そおだ。夜哉君には、僕を殴った仕返しをしないといけないですね。」

「ちっ：そう簡単に殺られねえよ！！」

腰の《赤桜・弑式》を抜いて、構える。

「ふふっ、新しい武器ですか。見たところ対して強そうではありませんね。」

愚者は地を蹴って急接近と突きを繰り出した。
持ち前の反射神経で、スレスレで回避した。

「やはり避けますか。人間にしてはやりますね。」

「生憎、人間辞めちゃった身なんでな。そう簡単に死なんぜ。」

言いながら腰のホルスターから拳銃を抜く。
僅か0.3秒の早撃ちも愚者には届かない。

「ふう、危ない危ない。ってあ……。」

愚者のかわしたところにあったのはスタングレネード。

丁度計算された位置に馬鹿馬鹿しい糸を踏むとスタングレネードのピンが外れて起爆されるという、なんとも簡単なトラップが実に十個。

いつのまに…と問われたら、咲魔が戦つてるときと返す。

当の本人は拳銃を発砲する位置も計算済みで、発砲した瞬間、真っ先に咲魔が吹っ飛んだ位置にダッシュしたのだ。

「おい、起きてるか？咲魔。」

「うっうん……。ごめん…。」

「少しは頭冷えたか？」

「……うん。」

直後に一帯に強烈な閃光が走ったので、タイミングを合わせて咲魔のめを覆った。自分は背中を向けて腕で覆う。

「んなわけで、スタングレネード全部使ったから補充分下さい。」

「…………。」

無言で渡された……。

確かに自分でもやり過ぎた感満載だしな。

ベルトにスタングレネードを固定して、拳銃をホルスターに収める。片手で赤桜・式式を正面に構えた。

「痛いですねえ。左手がイッちゃいました。スタングレネードに魔力を込めましたか。そんなんじゃない私は殺せませんね。」

眼帯で隠れていない方のめでニツコリと微笑んでいる。

愚者の身体がブレだした。分身をするつもりだろう。

「さて、僕は最大何人まで分身できるでしょうか。」

背後、横…斜め。全ての方向から囲まれている…。

「五人です。」

五人…。一人2、5人ノルマか…。厳しい…。

「夜哉は二人の相手をして。」

「了解。」

——行くぞ、赤桜・弐式。

魔力を流し込むと、ぼんやりと紅く光る。

魔力の補充は完了した…。

「うおりゃああっ!!」

刃と化した紅の魔力が愚者を襲う。

超高速超高密度の紅の刃を、二人係りで受け止めた。
だが、魔力は止まらない。

「ぐう…な…：…なんですか…。この高密度は…!!」

更に、夜哉は地面を蹴り、愚者に急接近する。

「はぁ…はぁ…。分身したのが運の尽きだったな愚者…。分身では、本体からの魔力供給が必要…。必然的に本体より弱体化する。更に、どう考えても俺なんかより咲魔の方が遥かに強いからな。本体はそっちに居るんだろ？」

「くっ…本気で魔力をつぎ込んで…。しかし、この魔力量…。」
そういつて、愚者の分身は爆散した。

「っ……だっはー。もう無理。」

俺はぶっ倒れたのであった。

咲魔 side

夜哉が頑張って二人も相手をしてくれてる…。
三人くらい、私だけでどうにかしないと…。

「アハハハ。殺戮人形姫さんは……宇都宮咲魔さんはどんなふう
哭いてくれるんですかね。僕は楽しみです!!」

やはり…本体はこっちか。
敵も馬鹿ではない。全て本体にしたら、一体一体の性能が落ちる。
ならば、傀儡を造って、魔力を通して操れば、傀儡は本体に劣るが
本体はかわらない…。

「無視…ですか。酷いもんですね…シャルロッテちゃんは…」黙

れ!!」…ふふっ、ようやく喋りましたね。」

「貴様の口でシャルの名前を呼ぶな！穢らわしいわ!!」

咲魔の後ろの空間が歪んだ。

空間には、様々な形をした武器の切っ先が無数に広がっている。

その全てが、オリジナルの武器や、伝説の武器のアレンジである。

「……無限の創造世界。」

その幾千に及ぶ宝具級の武器が愚者の本体に向けられる。

咲魔の黒い瞳は黄金色に輝いていたのだ。

——進化した人類、イノベイダー——

脳量子波を自在に操る事が可能で、状況把握力、空間認識力、身体能力、精神力…その他、寿命など、様々な能力が普通の人より特化した人類。所謂、進化した人類である。咲魔の場合は、不老不死であるので、寿命はあまり関係ないのだが…。

「金の瞳ですか。そう言えば、あと二人今したよね。あの頑固な瞳…。屈伏させるのに無駄な労力を使っただけですよ。」

「いけ。」

武器が次々と雪崩の如く愚者に向かって撃ち出される。

「いいんですか？範囲広すぎて夜哉君にも当たりますが。」

「なっ!？」

愚者は、丁度延長上に来るように、話ながら移動していたのだ。

一瞬の気の緩み。そこにつけこまれ、接近を許したのだ。

ズブリ…と、いつの間にか刺剣エストックになった西洋剣が、突き刺さる。

急所から外れていたのは、咲魔が刺される瞬間に避けようと全力で横に飛んだからだ。

「ぐっ…。」

「アハハハハ！！急所は外しちゃったけど、僕のエストックには魔力殺しの毒が塗られてるんだよ！どう？また魔力が吸い盗られていく感覚はサア！！」

「残念。」

愚者の腕が吹き飛ぶ。勿論本体だ。
同時に分身も消えた。

「結局、愚者は愚者ね。私がなんの対策もしてないと本気で思ったの？」

「ちい…。予防ですか…。今回は退きましよう。」

「逃がさない！！」

しかし、咲魔の抵抗も虚しく、愚者は、いきなり消えた。

「くっ…転移…。」

取り逃がしてしまった…。

深追いは止めよう…。この状態で増援を呼ばれるとつらい…。

「そうだ…夜哉……。って、夜哉!？」

地面に横たわっていた。幸い目立った外傷は見られないが…。

「酷い……。魔力が…。」

抜き取られた形跡はないから、一度に大量の魔力を使い、足りない分は自分の身を削って…。

自分の身を削ると、最悪、一生眼を醒まさない可能性がある。

更に、夜哉の魔力はとてつもなく膨大である。

理由は知らないが、初めて出会ったときから解っていた。

多分、大妖怪を上回る魔力量だろう。

「あ……。うう……。魔力供給…ねえ…。魔力供給…。」

魔力供給…。あー、今は止めよう…。

「で、終わった?」

霊夢が涼しい顔をして歩み寄った。結界は既に消してある。

「え、あ…うん。」

「なんか、夜哉が伸びてるけど……。あ、魔力供給がんばれー。」

……。なぬ。

結局、宴会は中止にならず、魑魅魍魎の博麗神社は翌日の朝まで賑やかであったのだ。

愚者―ザ・フール―（後書き）

えー、魔力供給でピンときた貴方はエロ……偉い W W W

では、次回にご期待 W W W

赤眼と外出（前書き）

はい、若干エロいです。ごめんなさい（ズサー

では、どうぞっ！！

赤眼と外出

咲魔side

早朝。

魑魅魍魎とした神社も静まりかえり、酒の呑みすぎで酔い潰れた連中が…霊夢以外全員地面や縁側、もしくは神社の境内にスヤスヤと、もしくはイビキをかきながら寝ている。

私はと言うと…夜哉が寝息をたててグッスリと寝ている布団の横で正座してぼうっとしている。

とはいっても、頭の中は早朝とは思えないくらい高速回転してショート寸前なのである。

ま…魔力供給しなきゃだよね…うー。

なぜ魔力供給程度で悩まなければならないのか…。

魔力供給の方法が一番問題なのである。

咲魔も、他に方法があるのなら躊躇なく出来た筈なのだが…。

あ、あー。魔力供給って…。き…キスだよね…。

そう、口付けである。

くどいようだが、魔力供給の方法これ一つであるのだ。謂わば、人工呼吸に近い行為なのである。魔力供給とは。

「うー。自分だけスヤスヤ眠っちゃってさ…。」

一度その眼で見てしまえば虜になってしまっただけ今夜は一睡もできな

かったのだ。

その事実を知っているのは本人と、霊夢だけである。

霊夢はなんだかんだで人払いの結界を張ったらしく……。

「あ、あんたのせいだからね!!夜哉。」

紅のパーカーの少し大きいフードを深々と被り、見えない艶やかで綺麗でさらっとした黒髪が、重力に従い、枕に投げ出されている。同じくフードの陰に隠れている顔も、二十歳近いとは思えないくらいいつやつやの肌で眼が大きくて、睫毛が長くて、クリツとして……。

「な、何を考えてるんだろうね……。」

でも、思考が止まらないのは仕方ない。

「ほう……。」

夜哉の顔に意味もなく吐息をかけてみる……。

「はぁ、可愛いやつめ……。」

夜哉の上に馬乗りになり、首の後ろに手を掛ける。

魔力が体を巡るまで時間がかかると言う。大体一時間かかると言う。

うー。唇赤いなー。ちょっと嫉妬しちゃうわ……。

咲魔が赤くない訳ではないが（というか赤いが）、夜哉は俗に言う女顔なのが問題なのである。

本人は少しコンプレックスらしいが。

顔を近づける毎に顔が赤くなり、胸の鼓動が高鳴っていく。

お…落ち着きなさい…私。

き…キスの一回や二回…いや、二回はちょっと…って！関係ない！！

やっこのことで唇が触れあう。

うわー。ホントにキスしちゃった…でも…これじゃ駄目なんだよね…。うー、恥ずかしいな…。

流石に舌は入れないでいいだろうと鷹を括っていたのだが…どうやら、そうでもないらしい。

わ、私だって初めてなんだから…。

仕方ない、ここまで来たらやけくそだ。

「んっ…んー!？」

魔力を吸い取られる感覚…。なるほど、やはり魔力が大量に必要なのね…。

私の魔力だったら、また少し夜哉が人間離れするだろうけど、た…助けてあげただけ感謝しなさいよね…。

やっと、魔力の供給が終わったようで、脱力感が消える。だが、同時に少しの疲労も。

「んうつ…はあ、はあ、全く、あんたのせいでこっちは寝不足なの…。」

あー。でも、夜哉の唇って、柔らかかった……無し無し!! 今のは無し!! 訂正!

若干淫乱になりつつある思考を無理矢理ただし、部屋の隅の壁にもたれ掛かるが、高鳴る鼓動と、熱を持った顔はどうしても善くならない。

くっ……こうなったら、無理矢理にでも寝る!!

火照った体を冷ますために、無理矢理氷を頭に乘せて、壁に寄りかかり、寝た。

夜哉 side

「ふあああ……よく寝た……っと、大学の準備……は、ねえよな。」

どうにも、実感が薄いのだが、昨日は魔力の使いすぎでぶっ倒れてしまった。

んで、生きてるってことは咲魔がなんとかしたんだろうな……。ったく、自分の使えなさに笑いが込み上げるぜ……。

ん? 気のせいかな? 俺にしてはやたら目覚めが良い気がするんだが……。魔力使い果たした上に有り余ってる感満載なんだがよ……。ま、気のせいかな。

「んお、咲魔が居る……なんで?」

壁に寄りかかって寝てるが、頭に氷を乗せてる……。ああ、吞みすぎ

か。

コイツ、酔っぱらったらどうなるんだろな…。

起こしたら悪いので、そっと部屋を出た。

「お、霊夢。おはよ。」

「あ、夜哉。朝御飯食べてく？」

「おう、悪いな。」

霊夢がクスクスと笑っていたのはどうしてだろう。

「そういえば、咲魔は？」

「ん？なんか寝てたぜ。氷枕してたけど呑みすぎたのか？」

しかし、霊夢はクスリと笑って適当にはぐらかすのでどうしても要領をえない。

さて、縁側を歩いてると、地獄絵図（と言うほどでもないのだが。）だった。

庭には、だらしなく萃香や魔理沙が寝てるし…他もまた然り。見なかったことにする。

居間に到着すると、アリスが既に席について苦しそうにしている…呑みすぎである。

「おはよう、アリス。」

「うー、おはよう夜哉…。」

グイッと水を呑んでいる。

アリスは二日酔いだろうから朝食はとらないみたいで、朝食をとるのは俺と霊夢だけ。

霊夢は…人間だよな…。…。すげえ呑んでた記憶があるんだが…。少なくとも戦闘前は。

朝食は結構早く食べ終わったのだが、霊夢料理上手いな…普通に美味しい。てか俺、長年一人暮らしでも外食とかあんまし行かなかったのに、年下に（女子だけど…。）確実に料理スキル負けてるよな…。

悔しい…。

「そういえば、霊夢。」

「何？」

「幻想郷にも通貨ってあるんだよね？」

「ええ。現世のは使えないけどね。」

ほう…じゃあ働かないとな…。

「幻想郷にも学校的なのはあるのか？」

「人里に一つだけ寺小屋があるわ。」

よし決めた。働こう、そこで。

んじゃ、面接だな。ネットとかないし…内定……。まあ、気にする事はない。
どうせ行ったら即面接だろうし。そして、今日はリアルで土曜日だからな。

「あ、先生になるつもり？」

「一応な。」

「へー、頭いいのね。あと、はい。」

なんぞ？と思って手渡されたのは手鏡。
寝癖でもついていたのだろうか。

鏡に自分を映してみる。なんのことはない、いつもの髪型にいつもの……か…お！？

「つて、ええええええええ！？」

昨日まで確かに漆黒だった俺の黒目が、真っ赤に染まっていた。比喻ではなく、マジで。

「えっ…ちょっ…ま…。マジで妖怪化!？」

「みたいねえ…。本格的に現世に戻れないわね。ま、私はどうでもいいけど。」

ニコニコしてお茶をすすする紅白巫女（博麗霊夢ともいう。）の後ろに鬼が見えたのは眼の錯覚だろうか…いや、そんなはずはない。反語。

数分後、気を取り直して、フードを深く被って、魔理沙達を起こさないようにそっと神社を出た。
ううむ、やっぱり空気が美味しい…。ま、妖怪が襲ってこなければ文句無しなだけだな…。

てか、こんな道中に妖怪が出たら参拝客なんて来ねえよ霊夢。立地考えようぜ立地。豪華なところによ。

リッチだけに…。

ゴホン、すまない。変なギャグはたまに頭を過るのだ。

「きゃああああっ!!」

お、悲鳴だ。助けに行かねば!!

走っていくと、人里の子だろうか、小さな人間の女の子が下等で弱そうな山犬型妖怪に襲われていた。
一匹じゃないぜ。五匹くらいだな。

「はい、突撃隣の朝御飯。妖怪は退散退散。」

「うっ…ふええ……。よっ…妖怪がまた…。」

おいおい、そんな眼で見るなって。俺は一昨日くらいまで人間やってたぜ…。

「あ、やっぱこの眼怖い？」

コクリと頷く少女。

あー、嫌われちゃったよ…。なら、かつこいいところ見せなきゃな。
おい、今ロリコンとか思った奴前に出ろ。

「可愛い子に血生臭いところ見せられないな。」

パーカーを脱いで、シンプルな黒のシャツ姿になる。

余談だが、パーカー着てるのは、俺が女顔だから、よく女に間違えられるわけな。それが嫌でパーカー着てるんだ。フード被れるし。

正直暑いけど、幻想郷に来てからそんななんないな…。人外だからか？

「ほら、これ被ってな。お兄ちゃんが終わらせるからよ。」

女の子は怯えながらもパーカーを被り、眼をふさいだ。

「ほーらわんこ。かかってこいよ。」

一匹が突進してくる。

確かに一般人には速すぎる。

でも、何だかんだで昨日の戦闘が役に立ったようで、正直くっそ遅く感じる。

「おせえよ。」

ベクトルの能力と反射の能力を合わせた只のパンチ。

加速度を全開にして向きを向こう側…山が見えるな…のほうに向けて、反射の能力がブースターとなる。

貧弱なパンチ（魔力も込めてない。）でもホームランバッター驚きの飛距離を延ばせるのである。

「ホームラン。」

「キャウウウウウン！！」

啞然と見つめる四匹。

勝てぬと知ったら一目散に逃げていった。

「ほーら、終わったぜ。」

「あ、ありがとう。お兄ちゃん。」

「おう、礼は良いから寺小屋の位置教えてくれる?」

「うん!!」

俺がついてると安心と思ったらしく、女の子は顔色をよくした。因みにこの子は、親が病氣らしく、薬草を探していたとか。

仕方ないから俺も手伝ったら大喜びしていた。

この子の名は、穹^{そら}。

どうやら、家名はないのだろうか…。ううむ、幻想郷の仕様が解らん。

程無くして、人里に到着した。先ずは穹の家までだな。

到着すると、なんとまあ、普通に立派なお屋敷だな…。水無家^{みずなし}って書いてある…。有るじゃん家名。

ばたばたと、家のなかに入る。勿論「お邪魔します。」は忘れずに。

「穹、何処に行ってたんだ。もしかして、また外に出たのか?」

お父さんらしき人である。なんとまあ、…お父さんですね。俺は親居ないし知らね。

穹が言葉に詰まってるようなので、フォローを入れる。

「初めまして水無さん。俺は秋吉夜哉。ちよつとの間穹の用心棒してました。」

「なっ…貴様妖怪か!! おのれ。穹をはぐらかしおって!! とつとと去れ!!」

「あ、ひでえ…。一昨日くらいまで人間だったのによー。」

「お父さん、怒らないで。夜君は穹を助けてくれたの。いい人なの。」

そういえば、穹は俺を夜君って呼ぶ。親しみは沸くけど…ねえ。

「んじゃあ、言われるがまま去ろうかな。んじゃ穹、また縁があったら。」

「あつ、もう…帰っちゃうの?」

だって気まずいもの。

「ああ、悪いな。」

「だったら、また会おうね!! 夜君!」

後ろ向きに手を振って、屋敷を出た。

赤眼と外出（後書き）

俺待望のロリっ娘ゲッツ！！

ごほん、取り乱しました…ごめんなさい

寺小屋と神社と（前書き）

おはこんばんちゃー。いい加減他の小説も投稿しないといけませんね。

さて、最初は地味にグロ（？）ですがアーユーおk？

大丈夫だ問題ない。

寺小屋と神社と

愚者side

「申し訳ございません!! 次は……絶対……きゃあああっ!!」

現世から隔離され、誰も居ない空間……。いや、居ない筈の空間。

そこに、根城を持っている異端者排除軍団。通称『ザ・タロット』

お分かりだろうか、ここには二十二人のそれぞれの役職カードを持った達人が居る。

その一人が私、愚者である。

正直な所、私達の強さは世界以外余り変わらないのだ。ザ・ワールド

実際、カードナンバーが一番低い私が一番駆り出された訳である。

確かに、私達は達人であるが、それも魔力あつてのことだ。

異端者排除に失敗すると世界から痛烈な罰を受けるのだ。

「いだい……痛いれすう……あああああっつ!!」

雷が愚者を襲う度に焦げて、また再生する。

もう何度も何度も受けている。いい加減精神が崩壊しそうだ。

「俺の願いは、世界の秩序。わかってるな? 愚者。」

管楽器のように響く声も、既に愚者の耳には届いていない。ただただ機械的に頷くだけである。精神は既にボロボロ。身体は絶好調という摩訶不思議な状態に陥った。

「ふん、所詮はこんなものか。だが、使用用途は他にもある。電池

になってもらうとしよう。^{ザ・マジシャン}魔術師よ。」

ふっといきなり世界の前に転移をしてきた。

「お呼びで？世界。」

「次は貴様だ魔術師。任務は宇都宮咲魔と秋吉夜哉を捕らえよ。半死半生でも構わぬ。」

「仰せの通り。」

また幻想郷に魔の手が忍び寄るのであった。

side out：

夜哉side

んなわけで、穹んちから逃げるように飛び出した俺だが、正直な話寺小屋なんてどこにあるか知らない。

仕方ないから村人を梯子して行こうと思ったが…。

「あー、あの、すいません」

「妖怪!？」

ちょっ!!逃げんどいてー!

エンドレス

何だろうね。人種差別?

てかさ、フード被ってんのに覗き込むんだぜ。確かに、フードで眼が隠れるし怪しいと思うけどよ…。

「悲しい…そうとう…。ちくしょー。」

トホホ…。と行く宛もなくブラブラとあるいている。

「あのー。」

「いいよ。俺なんかどうせ妖怪ですよ…。」

「すみません。」

「あい、何でしょう。」

振り返った先に居たのは和服をきたショートヘアの紫色の髪をした少女である。

不思議なことに紫色の髪の違和感がない。

「寺小屋なら、私も行く途中ですので案内しますよ。」

俺は感動した。

「あ…ありがとうございます。俺は「秋吉夜哉。確か、昨日幻想入りした元人間。」へ？なんで…それを？」

「情報が早いんですよ。私は稗田阿求ひえだあきゆうです。さあ、着いてきて下さい。」

言われるがまま着いていく。

うむ、どうやら根本的に道を間違えていたらしい。
先程来た道をもう一度通り、穹の家を横切り、……全くの逆方向だったようだ。

「あ、そうだ……。俺妖怪だから寺小屋に入れてもらえないかも……」

「ふふっ……来てのおたのしみです。」

さて、歩くこと三十分。人里の端っくら辺に寺小屋が建っていた。そういえばと思い、阿求に今日は土曜日なのに何故寺小屋に来てるのかと問うと、「自習です。」と返された。……小学生くらいの少女が自習……。

うん、凄いな。俺も真面目に勉強始めたの中三の夏からだし……。え？部活？俺が入ってたと思うか？

「さて、着きましたよ。先生は職員室に居るか。」

「おう。サンキュ。」

うーむ、ホントに寺小屋って感じだな……。

でも、内装なかなか良いじゃん。なんかこう……ねえ？

あー、紅茶か珈琲があったら最高だよな。それに茶菓子とかさ。

ん？までよ。受付は何処だ？……いやいや、までまで。流石にいきなり職員室に入るのは図々しいだろう……。いや、確かに、アポ取らずに押し寄せたのも図々しいけどさ。

「君、何をしている。」

「のわっ！？関羽！」

振り向いた先に居たのは女性。白銀の長髪に真面目そうな顔立ち。頭には…ん？なんだこれ帽子？よくわからんが帽子なんだろうな。不思議そうな顔でこっちを見るので正気に戻った。

「あ、…すみません……。受付とか、無いんですか？」

「ああ、無いな。ところで君は？」

「あ、えっと。俺は、秋吉夜哉です。一応教員志望の…。」

「ほう。では、着いてこい。簡単な面接でもしよう。」

あれ、俺第一印象最悪だよな…。リアルに門前払い受けると思っていたんだけど…。

女の人に（名前聞いてないな…。）着いていくと、応接室に到着した。

「座って良いぞ。では、自己紹介しよう。私は上白沢慧音^{かみしらさわ けいね}。寺小屋の教員だ。」

俺も簡単な自己紹介をした
恐縮しながら座る。

「ふむ、君は見たところ妖怪のようだが？」

「はい。」

若干声が裏返りそうになった。

「ふっ、そう堅くなるな。私も妖怪。半獣だからな。」

上白沢…うわはくたく…：ワハクタクか…。詳しくは知らんが、歴史操作の獣って聞いた覚えがある。

「で、君はどの教科が得意なんだ？私は歴史と読み書きを教えているが。算数が得意だと助かる。」

「あ、算数できますよ。算数得意です。」

「ほう。ならば採用だな。明後日からよろしくな秋吉。」

あれ？こんなに楽勝だっけ？面接って…。

まあ、いいか。明後日が楽しみだ。

さて、面接も無事終了し、寺小屋をでたところで、重要な事が発覚した。

「あ、やべえ。道覚えてねえ。」

まあ、いいか。人里の探索もしたいし。

我ながらなかなか暢気である。

あー、いいなこの雰囲気。タイムスリップしたかんじがなんとも言えないね。

あと、何度も言うようだが空気が旨い。何度でも深呼吸していたいね。

でも、あれだな。ショッピングモールとかゲームセンターとか無いのが残念。

まあ、そんなものはただ雰囲気壊すだけだからな。

「あ、妹紅。」

「げっ…。」

げっ…とは心外だな。それはあの娘に会ってから言っしてほしいな。

「なんだ、あいつは居ないのか。ん？お前、妖怪だったっけか？」

「いーや。今日起きたら妖怪になってた。」

「は？」

「いや、だから眼が覚めたら妖怪になってたんだ。」

「なんじゃそりゃ。」

「全くもって意味が解らんから困ってんだよ。」

「変わってるな、お前。」

「うるせえ。」

ん？妹紅の後ろに人陰が…。

「穹？何やってんだ。」

「うう…妹紅さん歩くの早いよ…。って、夜君!？」

「なんだ、知り合いか？」

「まあ、成り行きでな。」

「やっぱりまた薬草探しやってたのか？」

穹はフフンと笑って籠に貯まった薬草を見せた。

俺は穹の頭を撫でながら、ふとした疑問を投げつけた。

「あれ、そういえば妹紅。なんで永琳さんここに連れていかないんだ？ 薬ならあそこが一番だろ？」

「あ……いや、あそこは……だな。」

「まあ、そうだよな。」

永遠亭には輝夜がいるもんな。ケンカするもんな。

「それと、博麗神社にもお詣りしなくちゃ。」

「おお、そうか。なら俺も博麗神社に行く用事あるから着いてくるか？」

まあ、道案内もしてほしいな…。

「うん！！じゃ、はい。」

うん？ 両手を広げたポーズはなんだ？

「妹紅さん早すぎて疲れたからおんぶして。」

ああ、そういうことか。

「はいはい。んじゃな。妹紅。」

「ああ。またな。」

さてさて、なぜ今まで気づかなかったか謎だが、地図なくても飛んでしまえばいいと今更思った。

んなわけで、今飛んでる。

穹は怖がるかなと思ったけど、なんかすごく楽しそうだ。何より何より。

「うわー。夜君！！これ面白いねっ！！」

「そうだな。こうやって飛ぶのはいいもんだ。」

咲魔達と飛ぶ時は常時ハイスピードだからな。それも悪くはないが、ゆっくり飛ぶのもまた良い。

「夜君じじくさいよー。」

「俺は十九歳です。妖怪になったのも今日だ。」

「えーっ！！ホントに！？」

穹は眼を見開いて驚いた。面白くなった俺は「ホントだぜ。」と笑顔で返した。

「因みに俺はおとといまで外の世界の住人だったんだぜ。」

「へー。でも、外の世界なんて、想像できないや。」

「まあ、幻想郷よりはきらびやかだったな。」

「わー。行ってみたいなー。」

「でも、俺は幻想郷の方が好きだな。」

「えー。なんでー？」

「さあな。強いて言うなら、星が綺麗だ。外は明るすぎて星なんて見えやしねえもんな。」

そんなこんなで、雑談をしながらゆつくりと飛行していくと、間もなく博麗神社に到着した。

霊夢が気だるそうに境内の掃除をしている。

「ただいま。」

「おかえり夜哉。で、その子は？」

「ただの参拝者だよ。護衛してきたんだ。」

「へえ、お賽銭箱は向こうよ。」

「はい。夜君、行こっ！！」

「お、おい穹！！」

穹を追いかけるとき、ちらっと霊夢がクスリと笑ったのは気のせいだろうか。

てか霊夢、なぜお賽銭を強要するんだよ…。

お賽銭箱の方に行くと咲魔が雑巾掛けをしていた。ふむ、役にたっているようだ。

「ただいま。咲魔。」

「あ、おかえり！夜哉…。」

ん？感情の起伏が激しいぞ咲魔。なぜ嬉しそうな顔でついにデレたと思っただけで一転、ゴミを見るような眼で見るんだ！？

「この、ロリコンがつ！！」

跳躍からの膝蹴りで俺は吹っ飛んだ。

今日も俺は苦勞しそうだ。

咲魔 side

うー、こいつはー。

あの後、不覚にも寝落ちしちゃったんだけど…夜哉も起きたなら起こしてくれたらよかったのに…期待してたのに…。

しかも、恥ずかしいから掃除でもして、気を取り直そうと思ったら…なんか小さい女の子連れてきてるし…。

うー、やっぱり年寄り臭いかな…私。この子も可愛いし…。

当の本人はそんなことは全く思っていないのだが、そこは女の子の感情である。

「あ、あー。ごめん、やり過ぎた。」

「いってて…危うく死ぬとこだったぜリアルに。紹介するよ、コイツは水無穹。ここまで護衛してきた人里の女の子であってそれ以上でもそれ以下でもありません。」

「ぶーぶー。夜君は私の友達だもん！」

「で、コイツが宇都宮咲魔。わけあって共同生活してんだ。」

穹は、少し考えた後、閃いたように爆弾発言した。

「咲魔は、夜君の恋人さん？」

「なっ……。…」

「いやいやいや、ちげーよ。只の同居人。」

断言されるとムカつく…。仮にも、き…キスしたんだからね…！あんたは知らないだろうけど。

「で、そこのお嬢様はいつになったら機嫌をなおしてくれるんだ？」

流石に、夜哉が構ってくれないからとか言えないよね…。

「……。」

「おい。」

「うるさい。」

それだけ言ってその場を離れてしまった。

寺小屋と神社と（後書き）

因みに、今んとこ登場してるオリキャラは、夜哉と咲魔と穹と愚者と魔術師と世界ですかね。オリキャラ多いなWW

死霊の侵攻（前書き）

またまたこちらを投稿。

原作は見なかった

原作なんてなかったWW

死霊の侵攻

夜哉 side

結局、何もおかしなことも起こらずに夜になった。

今日は明日が寺子屋の初日の授業だから念入りに考えて寝るつもりだ。

携帯の時計を見ると夜中の十二時。霊夢も咲魔も他の部屋で寝静まった。

「ふう…。こんなもんか。」

背伸びをして、風を浴びる為に外に出た。

電気が無い幻想郷では、真夜中は暗闇であり、雲が無ければ、ぼんやりと月明かりが照らす。

「あ、月出てる。」

和服を着て夜風を浴びながら月を眺めるのは幻想郷に来てからの俺のちょっとした趣味候補である。

「あー、涼しいなー。」

ぼおっとしていたら時を過ぎるのを忘れてしまうのだ。こうやってぼおっとしとくのも気持ちがいい。

「あ……うう……。」

ん？今なんか聞こえたよな？なんだろ…。

魔力を固めて鬼火をつくり、声の聴こえた方向に行ってみる。

「お、おい。あんた、大丈夫かよ!？」

少女が倒れていた。人間ではなく、妖怪であろう。

赤の髪をおさげにしている、濃緑のワンピースを着ていて、首にリボンと鈴を着けている。

だが、やはり特筆すべきところは頭についた猫の耳だろう…。

どうやら怪我をしているようだが…。今の時間、永遠亭は開いてないだろう。

仕方ない、咲魔を起こすのは気が引けるが道はそれしか無いだろう。この子は気を失ってるようだな…。

しかし、咲魔のところに連れていくのもさせてくれないようだ…：気配を感じる。囲まれてるな…：一体なぜ…。

気が引けるが咲魔を念話で叩き起こすでしょう。

「ん?なに、夜哉。」

「あ、咲魔?わりいな、敵だ。できるだけ早く来てくれ。」

それだけで念話を終了し、ナノトランサー（咲魔からいただきました。）から赤桜・式式を取り出した。

出てきたのはゾンビである。見ると、斧や剣を携えている。

「夜哉!」

「来たか!!この子は頼んだぞ!」

「わかったわ。一人で戦ってもらうことになるけど…。」

「上等だ。来いよ死霊ども。」

魔力を剣先に固めて一閃することで、魔力の刃を飛ばし、広範囲弾幕にできることは検証済みである。

遠距離攻撃をするのは勿論咲魔と少女に近づかせないためである。

「くっ…数が多い…。」

「で、なんで私を呼ばないわけ?夢想封印!」

陰陽玉から大玉の光が吐き出され、ゾンビに当たり、浄化されていく。

「霊夢か…。」

「まったく、私が神社の主なんだから私にちゃんと教えなさいよ。」

ニヤリと笑いながら陰陽玉から光の大玉を飛ばし、浄化しまくるのである。

「それもそうだ。悪かったな。」

霊夢が遠距離から攻撃するので、俺はゾンビどもに接近できるのだ。

赤桜・式式に魔力を纏わせて、切断力を向上させる。

大抵のゾンビどもは、一撃の元、粉碎できるのだが、何分数が多い。魔力をそのまま発射したりして、高殲滅力を維持している。

いくら多いとはいえ、数は有限である。まもなくゾンビは殲滅が完了し、戦闘は終了した。

「おい、大丈夫か？」

「ご：ごめんよ。手間をかけちゃって。あたいは火焰猫燐^{かえんびょうりん}。死体の運び屋なんだけど：。」

死体が勝手に動き出したのだろう。そいつらに襲われて逃げてきた。という訳だろう。

「大変だったな。俺は秋吉夜哉。よろしくな。」

「あたいの事はお燐って呼んでくれ。皆もそう呼んでるからね。」

霊夢の話によると、お燐は旧地獄なる所の住人らしい。推測だが、次なる殺人者が現れてる可能性がある。

タロットが関係しているようだ。

カードナンバ―0の愚者が現れたということは、次はカードナンバ―1の魔術師だろう。

タロットのカードはそこそこ覚えてるしな。

あくまでも推測だが、旧地獄に魔術師が攻めいつている。異端者排除の動向はわかりかねるが、旧地獄に根城を構え、徐々に侵攻してくるだろう。なぜか。お燐は旧地獄の住人。役職は死体の運び屋。ということは死体がたくさんあるはずだ。そこで得意の魔術を発動させ、ゾンビにする。

愚者の目的が俺と咲魔だったから間違いなく軍団で襲いかかるだろ

う。

しかも、お憐を襲ったと言うことは、俺と咲魔以外も安全じゃないな。

「咲魔、駄目だ。どう考えても、今から旧地獄に行かないと間に合わない。」

「……そうね。ごめん霊夢。私達、行ってくるから。」

「はー、私一人で人里の防衛面倒だし、……そうね、寺子屋の半獣にでも手伝わせたらいいわね。」

慧音さんの立場はどうなるんだろうか…。

「悪いね…なんか手伝わせるみたいで。」

お憐が申し訳無さそうに頭を下げる。

「いいさ。俺たちの目的と被らないでもないしな。」

お憐の案内に従い、夜空を飛翔した。

数はそれほどでもないのだが、道中ゾンビを見つけ次第魔力弾で浄化する。

案内されること二十分。地底に到着した。

「うおっ………すげえ嫌な感じがする。」

まあ、ゾンビたくさん居るんだろうな。

「……間違いないわね。この魔力は間違いなく魔術師よ。」

だろうね。タロットの順番的に。

魔術師というか、死霊操り師な気もするがな。

腐敗臭漂う地底を駆け抜けていく。お隣が言うことには、小妖怪の避難は完了しており、お隣の主人や、仲間がゾンビや、その親玉相手に奮闘しているらしい。

それと、鬼も派手に暴れまわってるとのこと。

で、鬼である…。萃香…だよな…。なぜ悪い予感がするんだろう…不思議だ。

「見えてきたよ。あの橋のところ！」

確かに爆音が激しく聞こえるが、……どうも萃香だけじゃないよな…。

ゾンビ達がフルボッコにされてるし、二対の鬼の表情はやけに楽しそうだし…。

「任してよくねえ？」

「奇遇ね。私も同じことを考えてたわ。」

取り敢えず見なかったことにして先に進むとしよう。

橋を渡り、抜けたところからゾンビが増えてきた。無尽蔵なのか…はたまた製造しているのか…微妙だが、後者であってほしい。製造しているのなら止めれば良いだろう。

「でも、この腐敗臭だけはなんとかならんかな…。」

「そうね…臭いはどうにもならないわね。」

先程から順調に前へ進めているのは、やはり咲魔の殲滅力の高さだろう。二つの鎌を自在に操り、首を、腕を、もしくは胴を落としていく姿はまさに鬼神と言ったところか。言ったら殺されそうだが。お隣は、最初は驚いていたけど、慣れたようだ。慣れって怖いね。

それはそうと、旧地獄に到着した辺りからゾンビの出現が急激に増えてきた気がする。まあ、ビンゴだったみたいだな。

「数が、多い！」

「臭いし…最悪ね。」

「まったくだ！！」

片手剣だけでは捌ききれなくなってきたので、スタングレネードを使用することも増えてきた。ゾンビ無尽蔵とか笑えない。

お隣も魔力弾を飛ばして頑張っているみたいだが、やはり数の多さに体した成果をあげていない。

「仕方ないわね…ちょっと離れてて、二人とも。」

頷き、少し離れると、咲魔は二本の鎌を正面に向けた。鎌の間には真っ黒な光が出現した。

「《死痛の鎮魂歌・序曲》発動。」

光がだんだんと膨張していき、大玉にまで膨れ上がる。周りの魔力を根こそぎ奪い取ると錯覚するほどの膨大で禍々しい魔力が集まり、うねり、密集する。

光が最大に達したとき、一気に前方向へ放射した。

膨大で、巨大で、暴力的な黒の魔力は真っ直ぐ狙い変わらず、ゾンビを殲滅していった。

「い…行くわよ！」

魔力をかなり消費するみたいである。少し咲魔の顔色がよくない。

「お、おい。大丈夫かよ!？」

「大丈夫よ。一時間程で魔力が元に戻るわ。」

一時間て…長いな…。それほど膨大なのか。はたまた咲魔が弱体化してるのか…謎だよな…。

考えてる余裕はないので、一気に駆け抜ける。咲魔の全力ダッシュに俺も着いていけるのは、やはり俺の妖怪化と生来の足の速さによる縁するんだろうな。

お隣も…猫だから足速いよな。着いてこれてるし。

で、お隣から案内してもらってるのは地霊殿なる場所である。お隣の主人とやらがファイトをしてるようだ。

まあ、相手が何者か解らないとは言っていたが、なんとも言いうようだが十中八九魔術師だろうな。さっさとぶっ倒して終わりにしたいけど、なかなかそうはいかないんだよな…。

「さとり様!! あたいだよ!! お隣だよ!!」

地霊殿に着くや否や、お隣が主である古明地^{いめいじ}さとりに声をかけた。
当人はと言うと、……。

「くっ……お隣……逃げて……」

「あはは。なかなか覚妖怪とはやりますね。心を読まれるのはここ
までやりずらいとは……。おや、ターゲットが来てくれたようです
ね。」

覚妖怪……人の心を読む妖怪と聞いたことがある。

それ故人々から忌み嫌われる妖怪だ。

で、外見。可愛いです。女の子です。俺はロリコンじゃありません。
薄い紫のショートヘアです。

あれ？ 咲魔が何故か俺をジト眼で見てくるのはなんでだ？

「さて、選手交替。さっさと懲らしめて帰るぞ。咲魔。」

「了解。」

片手剣を構えるのであった。

死霊の侵攻（後書き）

お隣さんは俺の嫁！

他には渡さぬ。阻止もされませぬ。

オンドウル侍S、コラボの件はもすこしまってください

対魔術師（前書き）

グロ表現注意

眠い眼を擦りながら投稿です。寝落ちなんてしてたまるものか

対魔術師

夜哉 side

「僕を倒す？　そう簡単には行かないよ。」

ズシン…。

地霊殿付近に地鳴りが響く。

ズシンズシン…。

次第に大きくなり、音が近くなってくる。

「何の…音だ。」

更に大きく、近づいてくる。

「ギャオオオオオー!!」

ゾンビである。だが、普通の人間のゾンビではなく、ドラゴンゾンビ。一体何処からこんな巨体がでてくるのやら…。

「うう…お隣…逃げ…て。」

ドラゴンゾンビの右手には黒髪長髪の少女が握られていた。片手にバズーカ砲を思い出すような、茶色の筒が装着しており、更に背中に羽根が生えているようだ。

「お空!?!?…まさか…お空まで…。」

握っている爪が少女に食い込み、苦悶の表情と、苦痛の悲鳴をあげている。

「咲魔、魔術師は頼んだ。俺はあっちを狩る。」

「……わかったわ。気を付けてね。」

「死にはしないさ。」

魔力を纏わせて、地面を蹴り、跳躍する。さらに、能力の発動で、空を飛んだ。

「まずは、小手調べだっ!!」

赤桜・式式を突き立てるが、刃がゾンビに食い込まない。そのまま弾かれ、手に響いた。

「くっ…堅い…。」

一旦ドラゴンゾンビから距離をとろうと、後ろに下がろうとする。全力のバックステップにもかかわらず、振られてきた尻尾にもろ命中。ゴキッと肩が外れた音とどうじに、岩壁に一直線に飛ばされた。

「夜哉!!…くっ…コイツ!!」

「あははは。君は彼の心配が出来る立場かい？本当に死ぬよ。」

言うと同時に何十もの大魔方阵が咲魔に向けられる。

直後、爆音が響き、幾百もの雷が襲う。

既に彼女の目は金色の輝きを放っている。

何十も花卉型の盾を展開し、雷の豪雨をひたすら防いでいるのである。

夜哉は、壁との激突の際、あばら骨を二本くらい折った。魔力を使って強化させても折れたのだからおのずと攻撃の強力であるのが解るだろう。

「くっ…ふっ……。」

自分でも骨が折れたくらいは識別出来るほど痛い。

幸い肺に骨が刺さると言うことはない。

しかし、片腕がまったく動かないし、体自体が動かない。

「ゲホッ…ゴホッ……。」

死を予感した。

確かに妖怪化し、身体能力が格段に上昇したし、咲魔との稽古、愚者との戦闘で幾分戦いもマシになったが、動けない状況で、虫の息である俺目掛けて死竜が突っ込んでくるのだ。流石に無理だろう。

——ソウダ、オマエニハ無理ダ。

またか、誰なんだよお前。

——オレハオマエダ。

はぁ？意味わかんねえ。

——ドウセオマエデハ無理ダカラ、アノ時ミタイニ貸セヨ。

貸すって…俺はお前に何も貸した覚えなし。

——スグニ終ワル。殺シノ快樂ヲ教エテヤルヨ。

殺し？快樂？意味わかな…。

「はあ、魔力が有り余ってるのに…。宝の持ち腐れにも程があるぜ。」

あれ？なんで…体が勝手に…。

「だから、教えてやんだよ。殺しをよ。」

何故か骨は修復している。

「赤桜・式式。魔力放出で剣を形成だ。」

赤桜・式式は、呼応するように赤色の魔力を放出して、丁度ガンダムのビームサーベルのような形になり、固定された。

「いい剣だ…。イメージ通り。」

あと数秒で死竜と接触する。

「ふん、殺しではないか。死霊は死んでな！！」

すれ違い様に腕を落とす。虫の息ではあるがお空が救出された。

「はあっ！！」

光の剣は、胴から死竜を両断した。
不気味にもゾンビは声を上げず、ズシリと倒れた。

「ふう、心配すんな。宿主の体を食ったりしねえよ。ちゃんと返すぜ。」

いったいなんだったのか解らなかったが、取り敢えず全身の感覚が戻り、激痛が戻ってきた。

皮肉な事に、意識を飛ばす程の痛みではギリギリない。

岩盤にもたれ掛かり、休息をとることにした。

「頼んだ…ぜ。」

咲魔 side

明らかに魔術師の力が落ちていく。

ふと、見るとドラゴンゾンビは夜哉が倒したらしく、両断されていた。

多分、死竜操りに、大量の魔力を費やしたようだ。

七輪の花弁を解除。剣を空間に形成する。

発射する。質量が小さくなった雷はいとも簡単に打ち破る事が簡単だった。

剣の群れが魔術師を襲った。魔術障壁は、堅固であるが、幾百、幾千もの剣の群れには、対抗できず、次々と破壊されていく。

「くう…使えない奴め…。死竜ならもつと役立つと思ったが…。」

魔術障壁が強力になる。破れない訳ではないが、こちらも剣の一つ一つに魔力を消費するので、疲労が馬鹿にならない。

「くっ…剣が…。」

次第に、力を失っていくが、魔術障壁は健在。

「打ち破れない…!!！」

突如、背後に大量の熱を感じる。

お空と呼ばれた少女が、腕についた筒を魔術師に向けているのだ。段々熱量はあがっている。まるで周りの熱をもくろい尽くすようだ。臨界に達したとき、宣言された。

「メガフレア!!!」

筒から大量の原子反応を感知。恐らく核の力だろう。

「「いっけええええええ!!！」」

爆音。魔術障壁を突破した。

「ああああああああっ!!！」

熱に飲まれた魔術師は、悲鳴をあげる。

運が良いのか悪いのか、私達の攻撃で死ななかった魔術師は、苦しみ身をよじって痛がっている。

「と……とどめよ!」

黒鍵をハイスピードで投擲した。

狙い違わず、真っ直ぐと魔術師の腹へと、突き進む。

これで終わりと思った時だった。

夜哉 side

咲魔が剣を投擲した。だが、それは魔術師には当たらなかったのだ。受け止めたのは少女。

身長は120代であろう。艶のある黒の長髪に、大きな丸い帽子を被っている。

色白の肌で、眼の色は紅。

特徴的な耳は、犬の耳を思い出させる。

服装は、黒のキャミソールドレス。

「シ……キ……!」

咲魔は眼を見開いて驚いている。知っている人だろうか。

シキと呼ばれた少女は、靴で魔術師を蹴った。

「ぐ……あ……」

「役立たず。」

瞳には何の感情もこもっていない。まるで、人形のように。

「わざわざ醜態を晒したあんたを迎えに来てやった。感謝しろ。」

「……ああ…わかったよ。ストレングス力。」

彼女が年相応の屈託の無い笑みを漏らすと、魔術師の姿はいつのまにか消失していた。

「さて、久し振りだねえ。咲魔。と、君が咲魔をたぶらかした秋吉夜哉だね?」

「シキ……なんで…。」

「人聞きが悪いね。一人脱走したのはそっち。で、私は忠誠を誓った。それだけだろう?」

話が見えてこない…。俺の入る領域ではないのだが。

「ゴホッ…。たぶらかした訳じゃねえ……。」

突然、腹に鈍痛が走った。後ろに吹っ飛びながらも必死で顔をあげると、シキが居た。ニヤニヤと笑っている。

「ゴホッ…ゲホッ…。」

「夜哉!!」

シキは、振り向くとまたニヤリとした。

「お姫様は眠ってもらわないとね。」

いきなり咲魔に瞬間移動して、手足の自由を奪う。

そして、突然口づけをした。

「ん!?! むうつ……ふぁ…。」

咲魔は地面に倒れ込んだ。

「即効性超強力睡眠薬。さて、特に意味はないけど、いじめごっこでもするかな。暇だし。」

ドカツ…。鳩尾に蹴りが入る。

「あ……が……。」

背中に膝が叩き落とされる。

「ぐっ……うつ…。」

次第に、胃の中のものが込み上げてくる感覚がした。

「あれ? 吐いちゃいそう? やだなあ、汚いし。」

限界に達した。胃の中のものが全て逆流した感覚に見舞われ、必死に堪えようとしても、こればかりは無理があった。

堪らず四つん這いになって、地面に嘔吐する。

胃液はほとんど塩酸らしい。食道を胃液が逆流するのは結構苦痛である。

「う……え。ゲホッゲホッ。」

「うーわ、汚い。これじゃあ噂の女顔も台無しだね。もう一発いこうか。」

更に肘打ちが鳩尾に入った。

「が…はっ……。もう…やめ…。」

「アハハ。良いねえ。なかなかいい顔をする。」

俺の髪を握り、ズルズルと咲魔の隣に引き摺っていった。

「あ、男のくせに泣いちゃって。いたぶりたくなるな…。まあいいや。仕事もあるし。」

そのままシキは居なくなった。俺は泣きながら意識が遠退いていき、気絶した。

対魔術師（後書き）

シキが黒い……。いい子なんだけどね……。ほんととは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8215x/>

転生してもうた!!～幻想郷～

2011年12月10日23時52分発行